
東方千年歌

橙娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方千年歌

【Nコード】

N4781T

【作者名】

橙娘

【あらすじ】

＊／サイトよりの転載作品です／＊

後に予王と呼ばれる一人の女王が崩御した。

東の国、慶国では、徐々に飢えと災厄が広がっていく。

そんな折、常世の中心の位置する天の一部蓬山では、また祭りの季節を迎えた。新たな慶国の麒麟が、この世に生を受けたのだった。

景麒は少しずつ成長し、そして七つの時に、紅い髪の海客の少女と出会った――。

Prologue (前書き)

ご注意…

このお話は、小野不由美先生の「十二国記」シリーズの二次創作です。なおかつ、原作とは設定が著しく異なります。

【原作との設定の相違点】

「東方千年歌」は、景麒視点のお話となります。カップリングは景麒×陽子となります。

- ・ 景麒のはじめての王が陽子となります
- ・ 予王は自身の麒麟へと恋着し失道しましたが、その麒麟は、皆さんが知っている「景麒」ではない、先代の景麒となります。つまり、予王は麒麟と共に亡くなった、という設定です
- ・ 景麒が陽子を見つけるのは、成獣前、まだ七歳の時です
- ・ 陽子は景麒に見つけられて常世に來た訳ではなく、海客としてこちらに流れ着きました。よって、物語の最初、陽子は言葉が不自由です

上記の点にご了承できない方は、閲覧の回避を推奨いたします。

また、途中、曖昧ではございますが、性描写の表現が挟まれます。PG12を推奨します。

Prologue

あなたは、麒麟の生まれる瞬間を想像する事ができるだろうか。

その存在すら幽玄に近いとされる遠き蓬萊の地では、獣が誕生する事を、「産む」という表現を使用するらしい。蓬萊の獣の赤ん坊は、母の胎内に宿り、ゆっくりと成長していく。赤ん坊は一定時期を過ぎると、やがて母の体から外へと出ていく、と伝聞されている。その時の母の痛みは、尋常なものではなく、時には死にいたる事さえあるらしい。そのせいか、蓬萊の母の子への愛情は、この世界とは少々質が異なると聞く。

その点、麒麟は母なるものを持たない。かの神獣たちの神秘性は、その点から来るのだろうか。

空を大地とし、天をその一部とする、麒麟という唯一無二の美しい獣。母を持たず、人の姿を持ちながら人ではない彼等は、一体何を考え、どのように世界を見ているのだろうか。

麒麟は、女の形を取った妖魔のようなものが、親代わりを務めるという。その異形の親はしかしながらやはり麒麟の下僕であり、母とは決してならない。

彼等は本当に、「王への忠誠」のみを特殊な感情とする生き物なのだろうか。彼等の感情には、優しさと、憐れみと悲しみしか、持ち得ないのだろうか。

勿論、このような事を考えるのは不敬であり、同時に神々への冒瀆であると言う事は重々承知している。

それでも、ただ美しく存在している事しかできない彼等の生き様を想うと、色々と考えてしまう事も、確かなのだ。

それでも誰かが麒麟の生まれる瞬間を見、それがやはりただひとつの生命なのだと実感する事ができたとするならば、彼等の神性は失われるのだろうか、それとも。

天を自在に駆け回り、だというのに生き方を制限されてしまう麒麟という「生き物」。

私は彼等のその心に、とても興味をそそられる。

1.

その人は愛に生きた、と言えば、人は美しく切ない物語を想像するものだ。誰かを想い、傍にいたいと願い、そして愛しさを籠めてその対象に触れる事、それを脳裏に思い描いては、うっとり息をつき、そしてその光景に憧憬にも似た想いを抱くだろう。

愛に生きた女王だった。

後に予王と呼ばれることとなるその一人の王を、人はそう呼んだ。しかしながらその声音には、決して好意となるものを孕まず、ましてや羨望の想いなど一切含まれていなかった。

最期は、狂気ひとつを片手に彼女の命は絶えたと、そう伝えられた。つまりはそれが、その女王が滅する直前の、その国の姿の伝聞の形であったという事だろうか。王はすなわち国の一部。その称号を戴く者は、それに反論の余地を与えられない。王を一個人として考えれば、あるいはある種の儚い運命と言えるその生きざまに涙する者もいるだろうが、歴史は感情を持たない。ただその王がどのような施政をし、国にどのような益をもたらしたか、国をどのように導いたか、そしてどのように滅んだのか、その点のみを淡々と伝えられる。

彼女は自身の麒麟を愛した。

彼女がただ一人の女であったならば、彼女がどういった行為をしたようが、それは国に何の影響も齎さなかったであろう。しかしながら彼女は、女であると同時に最高の権威を得てしまった一人の施政者であった。人は彼女の恋を狂気と呼び、彼女の嫉妬を愚行と呼んだ。

彼女が愛した麒麟は死んだと伝えられている。道を失った女王を

抱いた末、徐々に疲弊し病にかかったのだと。

人はその麒麟をも醜聞の対象とした。何よりも清らかな生き物と伝えられてはいるが、右も左も分からぬ女王をたぶらかすとは、何と淫靡で淫らな獣であるのか、と。

麒麟は憎しみを持たぬ生き物だという。もしその噂が彼の耳に入っていたとしたら、彼は一体どのような感情を持ったのだろうか。それを知る人は誰もいない。

六年という、予王の短い施政の時代が、慶と呼ばれる東の国に与えたのは、混乱と、災厄と、飢え、そして死だった。

国民は死んだ。その死因には王が直接関わっていなかったものがほとんどである。しかしながら個人の死の原因にはされなくとも、国全体の人口の減少は彼女——予王を原因だと言う者も確かにいた。そして歴史の目から見れば、それはあながち間違っていない。彼女は確実に負の歴史を刻んだ。それは否定のしようのない事実だ。

今の慶国の状態を良好という者は一人もない。

飢餓が欲を呼び、欲が罪を犯し、罪は幸を奪った。

街の路地裏に蹲る少年たちの腕は必要以上に細く、筋は浮き出ており、目は落ち窪んでいた。人が通れば縋り、矜持というものを知らぬまま、彼等は気味悪がられながら生きる。それを哀れだと思いう程の余裕さえ、誰も持たない。

慶東国は天災と妖魔に襲われた。

人里であるはずの街は病み、そして凄まじい勢いで国全体を覆う。次の王は誰だ、と誰かが言った。誰であっても同じだ、と誰かが言った。

人がどう思おうとも国が国である限り、王は選ばれる。
その選定をする麒麟は、生を受ける。

そして麒麟と王は、出会うのだ。その世界がある限り、何度も、
何度も。

神々の住まう世界の一部でありながら、時折人間を迎え入れる場所がある。その場所は蓬山と呼ばれた。

所狭しと花咲き乱れ、人間ではなくなった女たちが神に仕える。

一人新しく仙となった女が、回廊を歩いていた。流れるような絹を何枚か腕にかぶせるようにして、せっせと運んでいる。まだ慣れない所作で、時折布を落としそうになり焦っているのが可愛らしかった。

蓬山は広い。初めてその世界を見た時、彼女は眩暈を起こした。
今でも時折その把握しきれない規模に目が眩む。

色彩鮮やかな布の数々は、皮肉ながら彼女が人であった時には決して目に入れる事さえ叶わなかったものだ。しかし彼女は今それらを細い体躯に纏う。

感傷に耽りそうになった彼女は、首を横に振った。

何せ新米女仙のせいかな、仕事は意外に多い。決して優雅で風流な生活を期待した末にこの地に住まうことを決意した訳ではないが、それでも忙しく入ってくる仕事にたまに面食らう事もある。

ふいに、強く風が吹いた。飛んでくる小さな朽ち葉の破片や砂の

粒から顔を守るために目元を片手で覆えば、たちまち色とりどりの布は風に乗り、そして辺りに散らばった。あ、と無念そうにぽつりと零した彼女は、風を感じた先へと何気なく視線を移す。

———何かの、産声を聞いた気がした。

それは音となって彼女の耳に届いた訳ではない。生命がこの世へ流れ落ちた事を伝えようとする何か、彼女にそれを「産声」と認識させたのだろうか。

そしてそれとは別として、どこから歓声が聞こえた。足早に駆けてくる他の女仙を見つけ、彼女は歩み寄った。

相手も気付いたのか、その顔には満面の歓喜を浮かべたまま彼女に軽く手を振った。

「何かあったのですか？」

「何かではない！お生まれになったのじゃ！」

「生まれた？」

首を傾げた女仙は、言葉を反覆する。相手は何を恍けた顔をしているのか、とでも言いたげに、笑いながら彼女の両腕を掴んで軽く揺する。

「そなたにとっては初の蓬山公となろう」

「蓬山公……」

呟いた言葉は空気に溶ける。それでは、と唇を小さく動かした彼女に、女仙は得意げに頷く。

「麒であらせられる。景麒がお生まれになられた！」

薔薇色に染まった頬を青々とした空へと向け、女仙は世界へと伝えるように明朗な声を出す。

———また、蓬山に祭りの季節がやってきた、と。

「芥瑚がそれはそれは愛しそうに寄りそっております」

一人の女仙が杯に茶を淹れながら笑う。

「そうか」

杯を受け取って、一人の少年が軽く笑った。少し口に含み、そして若干の間を置いて、顔を歪めて女仙を睨む。

「苦いぞ」

「さようでございますか？」

それでは、と取り澄ました表情で茶杯を下げようとする女仙に、少年は待ったと手を上げる。そして再度渋い表情を見せて腕を組んだ。

「この味は、早く帰れという俺へのあてつけか？俺だってこの蓬山公だった時代があっただぞ」

「さて、何百年前のことでございましょうか…。申し訳ないのですが、このごろ、物忘れが激しくて…」

口元を軽く引き攣られた金色の髪をした少年は、もういいよ、と軽く溜息をつく。

「ところで俺は景麒の顔を見に来ただけだ」

「もう少し後に来ていただければよかったものを。まだ生まれたばかりでございます。あまり刺激を与えたくはないのです。それに…」

「それに？」

少年を軽く一瞥した女仙は、頬に手をあててこれ見よがしに息をついた。

「初めて見る同族が延台輔では、少々景麒が不憫でございます」

「…お前な…」

頭を抱えて机に突っ伏した延台輔と呼ばれた少年は、暫くの後顔を上げ、そして腰を上げた。女仙は首を傾げ、歩きだした少年の後

をゆったりと追う。

「どちらへ？」

「帰る。邪魔者みたいだし」

拗ねたように言う少年に、まあ、とくすくすと笑みを漏らした女仙を再度睨んだ彼は、ふと真摯なものをその相貌に乗せる。

「とりあえず、早く成長してくれる事を祈っているよ。あれじゃ、あまりに慶の民が気の毒だ」

女仙は返事をしない。ただ少年の姿を視界におさめ、そして敬意を感じさせる風に、一度だけ礼をした。少年は軽く苦笑し、手を一度横に振る。

「その態度がいつも欲しいもんだけどな」

「延台輔が様々な点を改善なさる方が、遥かに効果的かと」

またも続いた暴言に項垂れた少年は、溜息をついてから軽く走り出す。その姿は金色に溶け、そして空に浮かぶ。

そこにいた少年は消え、代わりに黄金の四肢を持つ獣が天を駆ける。

その後ろ姿を見守っていた女仙は、軽く吐息をつき、踵を返す。彼女の行く先には、まだ微かに濡れた産毛を持つ幼い小さな獣が、静かに寝息をたてながら待っている。

2.

生まれたばかりの麒麟の毛は柔らかく短く、淡い朧月の色をしている。

景麒は健やかな寝息を立てて、女怪の芥瑚に寄りそうように眠っていた。時折、何かに反応するように瞼がぴくりと動いたり、耳を左右に動かしたりしている。それを母親代わりとなる芥瑚は優しく見つめ、時折、その鬣を梳いてやったりしていた。それはまだ量が少なく、羽毛に覆われた芥瑚の手を優しく撫でた。

女仙はこぞって景麒の世話をしたがったが、生まれたばかりの麒麟というものは実に繊細で、景麒のまわりに侍る女仙は必然的に限られた。最も、途中で世話役は何度も入れ替わり、その裏での攻防は、神々の住まう地の仙とは思えぬほどの戦いとなったようだった。そのような出来事とはまるで無関係だとばかりに、景麒は神獣という呼び名に違わぬ、神性を感じさせる姿に成長していった。

それでもやはり彼は小さな子供で、例えば小さな蝶が飛んでいればすぐさま興味を示し、その短い尾を振ってよたよたと覚束ない足取りで追い掛けて行った。芥瑚はそれを半ば心配そうに、そして愛しそうに見つめ、そして女仙たちはその様子を微笑ましく思いながら目をやっていた。

しかしながら人間の子供とはやはり違うのか、彼が追い掛けていった蝶は彼の傍に留まる。ひらひらと羽を動かしながら景麒の鼻先を飛び回っている姿と、そしてその様子をじっと見つめている景麒を見ながら、若い女仙などは、麒麟とは動物や虫などとも話せるのか、と驚きの表情を浮かべた。それを年かさの女仙などに聞くと、ただ笑って何も答えなかった。

「麒麟は我らとは根本的に違うものじゃ。それに景麒はまだ幼い。人よりも、獣に近い性を持たれていらっしやる」

一人の女仙がこう言った。

「いかに幼くとも、蓬山公は我らの主。それを忘れて、不要な邪推などするでないぞ」

やんわりと、しかし断固とした声音で言われた言葉に、小鳥のよな声で噂話をしていた歳若い女仙たちは、一様に静かになった。

幼い頃、麒麟は獣の姿の形を常に取り、そしてその時に彼等は麒麟としての様々な能力を身につけるといふ。ある女仙が言う所によると、それは麒麟の本能により、女仙や女怪の預かり知らぬ水面下で徐々に成長するもので、自分たちが手助けする事では決してないのだ、ということだった。よって、彼女らはただ麒麟のために綺麗な水と住処を用意し、色鮮やかな果物を盛り、蓬山を綺麗に保つ。麒麟の内面は一体どのような成長をしているのだろうか。興味はあってもそれを探ろうとする者はいない。

それでも、景麒はふとどこか一点の方向を見てじっとしていたり、突如見えない何かに気付いたようにはっと体を動かしたりしていた。そのような仕草を見ると、やはり彼の中で確かに何かが起きていると、そう思えるのだった。

「景麒の様子は如何じゃ」

漆黒の艶やかな髪を混じりけのない鼈甲の簪でまとめあげ、淡い若草色の襦裙を纏った美しい女が現れる。細く長いその首を少しだけ傾けながら、一人の女仙に声をかけた。その場にいた女仙たちははっと顔を上げてから、すぐさまその場にひれ伏す。

「恙無くお過ごしになれております。草木や動物に興味がおありになられるようで、よくよくその後ろを追い掛けていらっしやい

ます」

そう言えば、その女はころころと笑い声を上げた。その顔は、人間離れした圧倒的な美貌を放つ。

もつとも、彼女は人ではない。その名を玉葉、世に碧霞玄君と呼ばれる、人の世界と神の世界の境界に住まう女神のひとりである。

「それは良い。健やかにお過ごしになられる事が一番。それが慶の民にも一番の幸となろう」

玉葉の言葉にはっと顔を上げた一人の女仙は、女神の尊顔を視界にはつきりとおさめ、そしてその後、そっと目を逸らした。

その行動の意味を、まるで言葉として聞いたかのようににはつきりと察した玉葉は、視線を流す様にして東を見詰めた。

「麒麟が亡くなればまた麒麟が生まれ、そして育つ。それは世の条理じゃ。慶の民は不憫じゃが、もう少し景麒が成長するまで待つてもらわねばなるまい」

「はい…」

女仙は切なげに息を漏らした。他の女仙がその様子をそっと覗き見る。

慶の出身の女仙は蓬山にどの程度いるのか、はつきりと知る事はできない。彼女らは蓬山にやってくると同時に故郷を捨ててきたからだ。互いに詮索しないのは暗黙の了解である。人の世を捨ててきた者たちの集まりだ。聞かない方が良いことは確かにある。

しかしながら彼女らがふと見せる瞬間が、確かに女仙たちが人であった頃の証拠として時折浮かび上がる。それには皆気付かない振りをするが、しかし記憶から消すことも、また不可能なのだった。

景麒は成長していった。

見ている方が不安になるようなよたよたとした歩きは消え、薄かった色味は少しずつ黄味を増す。時折はっとするような聖性を見せる時があり、その瞳には少しずつ幼さとは違うものが宿り始めた。

予王の治世が終わって数年。未だ幼い景麒は、本能的に国を想う心は持っていても、まだ知識として国の現状を考え、国の為に何ができるか、それを考慮する能力はない。

慶は荒れた。

王が崩御してから、次々と民家や街は妖魔に襲われ、途切れる事無く天災が襲い、ほとんどの人々は明日を生き延びる事ができるかどうかを毎日心配する。国を支えるはずの官吏は、予世の緩い規律に慣れ切ってしまう、自身の懷を温める事だけに労力を注いだ。

勿論その中には、民の為に何ができるか必死に考え、できるだけ国民を生かそうと扮装する官吏も確かにいた。しかしながら腐敗しきった官吏は国の中心としてのさばり、純粋に国を救おうとする役人から潰れていった。

景麒が生まれ、五年の月日が経った。

小さかった獣の姿は消えていき、鬣は少しずつ伸び黄味を帯びていく。風になびくその金色の波は見る者を魅了した。

よく見ると額のところにうっすらと盛り上がりが出てくる。これから彼が成長していく事の証のように見えた。

ある満月の夜、一人の女仙が宮の回廊を歩いていた。綺麗な円を描く光の源は、真夜中にも関わらず辺りを金色に染め上げ、そのせ

いか、明かりを持たずとも周りがよく見えた。

静寂を破らぬようにそっと歩く女仙は、足を止める。視線の向こうに、一瞬だが、一際明るく輝く一点が見えたのだ。一時止まってそれを見た女仙は、首を傾げた。

「何かしら：」

眩き、彼女は歩を進める。既に輝きは失われていたが、しかしどうしても気にかかり、その輝きが見えたところまで歩を進める。

そして目的対象に近いと思われるところまで歩いたところで、はっとした。

月明かりに照らされる、一人の子供がいたのだ。ぼんやりと空を見て、衣服を一枚も纏っていないかった。どうやら少年のようだった。子供が何故こんなところにいるのか分からぬまま、女仙はその少年に駆け寄った。

「ちよつとあなた：」

そこまで声をかけて、女仙はすんでのところで動きを止めた。白磁の肌に覆われたその少年の髪は、月明かりを受けて輝く。その色は月の光と同じ色をしていた。

声を掛けられて女仙を見たその瞳は薄いすみれ色をしている。切れ長の瞳が少し冷ややかな印象を与える、少し大人びた顔をしている。

「：蓬山公：？」

微弱に震える声で女仙は主人の名を呼ぼう。少年は肩程度に伸びた髪を揺らし、首を傾げた。

満月の光の降り注ぐ夜、景麒は人の形を取った。

淡い金色をした、量の少ない髪がさらりと幼い少年の頬にかかる。紫色の水晶のように透明度が高く、温度の低さをどこことなく感じさせる彼の瞳が書面に走る。長い睫毛が少しずつ動いては、一点に留まった。

彼が見ている書物は初歩の初歩だが、それでも彼の知識の吸収の速さは女仙たちを驚かせた。

「景麒は勉学が好きじゃ」

「蓬山公は賢くてあらせられる」

女仙たちはそう口々に密やかに言っては、愛らしく小さな麒麟の為に、小さなお菓子や果物を机の上に置いては去っていった。その微かな甘やかな匂いの誘惑に引っ掛かる事もなく、彼は自分の持つ本を次々と消化していった。

「やはり景麒は賢い」

ころころと笑いながら、女仙らが言う言葉に、芥瑚は自慢そうにその羽毛に覆われた柔らかそうな胸を張る。自身の麒麟が賢からうがそうでなかりうが、女怪にとっては知った事ではないが、それでも自分の大事な大事な主が褒められているという事が分かれば、やはり悪い気分はしないものだ。

分からぬ事があれば誰かに聞くことをせず、景麒は黙々と頭の中で考え、書物を調べ、それでも分からない事があつた時だけ誰かに質問をする。時折女仙が答えられないような高度な質問を発する事があり、彼女らは目を白黒させていた。

景麒が、王、という存在を知ったのは、いつの事だったのだろうか。

彼は本能的にはそれを知っていた。何故なら彼は王の為に生まれてくる存在なのだから。しかし王という言葉が言葉として理性でしつかりと認識するのは、彼が物心ついてからのことだった。

「かいこ」

舌足らずに景麒は自分の女怪を呼んだ。微笑んで景麒に顔を近づけた女怪の首に軽く手をまわし、景麒は甘えるように芥瑚の羽毛へと顔をうずめた。

「ぼくのおうさまはどこにいるんだろうね」

足をぶらぶらと揺らしながら呟くように言う景麒に、芥瑚は笑った。

「それは景麒にしか分からぬ事です」

「ぼくにだって分からない」

駄々をこねるように言う景麒の頭を軽く芥瑚は撫でた。小さな羽が耳や頬に当たり、景麒はふわふわと自分をくすぐられる感触に、微かに笑いながら首を縮めた。不器用な仕草でかゆくなった頬を掻いた景麒に、芥瑚は顔を寄せる。

「麒麟は王の存在を感じ取る事ができます。慶国の王は景麒にしか分からないのです」

「ぼくにしかわからない…」

芥瑚の言葉を反覆した景麒は、薄い山吹色をした長い睫毛を数度瞬かせる。そして唇を尖らせ、やはり分からない、というように首を振った。

「本当に？どこかに何かを感じられませんか？」

無垢な瞳でまっすぐに女怪を見上げた景麒は、数秒そのままの体勢を保つ。そして、ふと違う方向へと吸い寄せられるように顔を向けた。

東の空へと、幼い硝子玉の瞳が留まる。その表情に変化は見られなかったが、何かしらの存在を既に感じているかのように、その目

は一定方向をじっと見つめていた。

しかし、その後景麒は小さな腕を伸ばして芥瑚に抱きつく。駄々をこねるように一言小さく呟いた。

「わからない」

「そう。左様でございますか」

女怪は麒麟に無理強いをしない。柔らかな羽毛に体をうずめて目を閉じた少年の頭を芥瑚は撫でる。やがて小さな息を立てて眠り始めた小さな少年を抱え、芥瑚は彼の牀へと移動した。

手が届きそうに、空が近く見える日だった。

沸く泉の傍を通っていた一人の女仙は、違う女仙が慌てたように走って移動しているのを見て目を丸くした。

「ねえ、どうしたの」

声を張り上げて呼びかけると、そこでようやく彼女の存在に気付いたように女仙は止まり、そして小走りでこちらに駆けてきた。

「蓬山公をお見かけにならんだか」

「景麒を？」

問い返すと、焦燥の入り混じる表情で女仙は固く頷いた。はて、と首を傾げた彼女は、桃色の唇を尖らせて一時考え、そして首を振る。

「本日はまだ一度も見えていないわ。どうかした？」

そう言うと、明らかに落胆した表情をみせて女仙は溜息をついた。

「それが、朝からどこにもおられぬのじゃ」

「景麒が？」

彼は元々外にでて活発に遊ぶような子供ではない。麒麟自体が一部の例外を除き、性格がそういった傾向にあるのかもしれないが、

景麒は女仙らが今まで見た中でも、部屋のなかでじっとして本を読んだりするのが好きな、物静かな性質をしていた。

外で跳ねまわって遊ぶような麒麟であれば、どこかに遊びにいったのかもしれない、とここまで切迫した様子は見せぬだろう。

「分かった、私も探してみるわね」

頷いて、女仙らは踵を返す。

穏やかな気候のはずの蓬山は、しかしその日、風が強く感じた。

風の音が高く通り過ぎる。砂埃が舞い、小さな塵が、金色の髪をした小さな少年の目の中に入る。しかし、少年——景麒は瞬きが出来なかった。いや、してはいけないのだ、と本能で分かっていた。少し痛みを感じる瞳に、涙が滲む。それでも、少年の瞳は目の前を見据えたままだった。

芥瑚が背後でじっと自分の動向を見守っているのが分かる。芥瑚は全く動かず、そして景麒も全く動かなかった。汗が額に滲む。拳を握り、ふらつきそうになる体を少年は必死で堪えた。

景麒の目の前には、今、巨大な犬のような体つきの、灰色の妖魔がいた。

妖魔妖獣魍魎魍魎が跋扈する土地、黄海。その地に囲まれた環境で育ったのだから、勿論妖魔を見るのははじめてではなかった。しかし、ここまで全身を圧迫されるような威圧感を感じるのははじめてで、景麒はその巨大な体軀をみた瞬間、自身の中の何かが静かに目覚めるのが分かった。

何故恐怖を感じなかったのだろう。

麒麟をずっと見てきた女仙なら分かる。妖魔と対峙し、それを威

押し征服し、服従させようとする事は麒麟の本能だからだ。

しかし、景麒は青い炎のように自身を静かに燃やすものの正体が、掴めなかった。このような獰猛な牙を持つ恐ろしい獣に対し、何も感じない自分こそが不思議だった。

対峙する妖魔は、ますます力を増した。何故か手に取るようにそれが分かる。

芥瑚は今すぐに麒麟を抱きしめて守ってやりたい衝動にかられる。彼の体躯が見えない何かに押され始めているのが分かる。

この妖魔は力がある。今使令として下す事ができれば、この先景麒にとっても心強いこととなるだろう。しかし景麒は折伏をするのは初めてだ。

芥瑚は景麒にせがまれて黄海に連れて出たことを後悔した。この妖魔が出た時点ですぐに逃げれば良かったと思うが、景麒と妖魔の目が合った瞬間に折伏がはじまった事を悟った芥瑚には、もうじつとして見守るしか術がないのだった。

妖魔の力はますます増した。幼い少年は、体中汗だくだった。限界が近いのかもしれない。

その時、景麒が、ぴくり、と動くのが分かった。一瞬の動きだったが、彼が、まだ力が残っていることを示しているように見えた。

幼い少年の眼には力が静かに漲っていく。その小さな耳には、――潮騒が届いていた。

空耳のように、しかし彼の耳に確かに届いたのだ。景麒は何故かを知る由もないが、その声が、彼に力を与えたのは確かだった。

――ここはどこ、と。

微かに低い、少女の声が。

*

潮騒が響く。

常世と、そして東に繋がる蓬莱という遠い土地を結ぶと言われている、虚海。その波打ち際には、様々な残骸が散らばっていた。

近隣の村は崩壊していた。民家は跡かたもなく潰れ、至る所に色々なものが散らばる。

砂の上に、一人の少女が倒れていた。見慣れぬ衣を纏ったその少女の褐色の足を、波が覆っては、また引いていく。

蝕と呼ばれるその巨大な嵐が、また一人、異界の少女を連れてくる。

びくり、とその細い指が動く。震えるように肩を動かした彼女は、呻き声をあげながら顔をあげた。玉のような翠色をしたその瞳が、海を見て、陸を見る。

その動作を緩慢に繰り返した少女は、数度瞬きをした。

「…ここ、どこ………？」

波に揉まれて傷ついたその肌を、血のように真っ赤な髪が、彼女の肩を伝って落ちた。

＊

空耳かもしれない。

しかし、景麒の耳に届いたその少女の声は、どこか懐かしく、景麒はその声のもとに走って行って、その少女が誰なのかを確認したくなる。

その欲にも似た感情が、景麒の力を増長させたのだろうか、景麒の額が次第に熱くなっていく。

汗が額を伝い、落ちていく。しかしまるで大地の力を吸い取るように沸き上がる力は、徐々に目の前の異形の獣を制圧していつているのが手に取るように分かった。

———下れ。

景麒は強く思う。額が燃えるように熱い。その一点に体全身が集中していくのが分かった。

「下れ」

声に出せば、それは力となって妖魔に注がれる。妖魔も徐々に力を増す。

しかし景麒の体のどこかに、その名は降りてくる。景麒は無意識に、しかし全ての意識を集中して、その名を口にした。

「……………下れ。————班渠」

体から力が抜ける。遠のく意識の中で、芥瑚が彼の名を呼び、駆けてくるのがうつすらと分かった。

鉛のように重たくなった自身の体を持て余しながら、景麒はぼんやりと考える。

———ああ、そういえば、あの声のひとは、だれだったんだろう。

4.

蓬山に戻った景麒を待っていたのは、女仙たちの叱責、そして賛辞だった。

「何故おひとりで黄海になど出られました！」

「蓬山公に何かあったら我らはどうすればよろしいのじゃ！」

「これは景麒が折伏された使令か！」

「わずか六つの歳でここまで強力な妖魔を折伏されるとは、素晴らしい麒麟であらせられる」

口々に思い思いの言葉を口にする女仙たちに対し、しかし景麒は疲れが勝って返事を返す事が出来ない。瞼が重そうにとろんとしている彼を、芥瑚が心配そうに抱えている。

遠慮呵責のない女仙たちに、古参の女仙の一人が一括して黙らせた。

「蓬山公はお疲れじゃ！その程度の事も見て分からねのか！耳が聞こえておるならば、すぐさま道を開けよ！」

途端に彼女たちはきよんとした表情を一樣に見せた。その後黙り込んでからさつと横道に逸れた女仙たちの間を、女怪に抱えられた景麒が通り過ぎて行く。その後には、景麒が出会った時とは比べ物にならない程穏やかな――恐ろしい顔はしているが――顔つきをした班渠が続く。

景麒は満足げに頬を紅潮させて眠っている。

東からの風が、彼の頬を撫でた。

その夜、景麒は牀にもぐりこみ、顔だけを出して芥瑚に手を握ってもらっていた。

「ねえ…芥瑚」

「はい」

「もうすぐ秋分だね…」

芥瑚はほんのりと笑った。

「さようでございますね。景麒にとっては何度目の安闔日となりましょうか」

「わからない…。もう、覚えてないよ」

ほう、と遠くを見て小さな口から一丁前に溜息をついた景麒を見て、芥瑚はしのび笑う。

「次は王様が見つかるよろしゅうございますね」

「…うん……………」

そう呟いた景麒の脳裏に、班渠を折伏する直前に聞いた潮騒、そして少女の声音が甦る。

——あれは、誰だったんだろう…

「芥瑚」

「もうおやすみなさいませ」

景麒はひとつ頷いてから、芥瑚の手を握る。

「ひとつだけ、いい？」

顔を近づけた女怪に囁くように、景麒は問う。

「あのとき…、班渠を折伏したとき、なにか、女のひとの声をきいた？」

芥瑚が不思議そうに首をかしげるのを見て、景麒はやはり空耳だったのか、と思う。いい、と手を振ってから就寝の挨拶をして、そして布団にもぐりこむ。

それでもその声を聞いた方角の東から感じる「何か」は、消えてくれそうになかった。

秋は深まり、四季折々の花々を常に咲かす蓬山でさえも僅かに紅葉

が見られるようになってきた。秋分は過ぎ、我こそはと王になろうという人々が険しく厳しい道のりを辿り、山道をのぼってくる日々がきた。

景麒は既にもう数え切れないほどの昇山者の顔を見ている。そこまですぐ暗澹とした表情を見せる事もなく断りの文句を言う彼に、女仙らは彼の性格をよく象徴していると苦笑していたが、景麒はただ自身の主を待ち望んでいるだけだった。幼い少年に、それ以上の望みはなく、そして人の機微も分かりはしない。

それでもはじめて景麒を見る人々の表情からは、何か計り知れない切実なものが感じられる時がある。それを景麒は少しの怯えを孕んだ表情で見る。その怯えの正体は恐らく彼の本能からくるものだろう。

王が欲しいと切実に願う人々。その願いは幼い麒麟に一身に托される。その期待が一種の恐怖へと姿を変えて、度々に景麒にのしかかった。

最初の昇山者が蓬山へと辿りつき、また麒麟への謁見を求める。

景麒は度々慶の民と出会ったが、いわゆる「天啓」と感じられるものはひとつもなかった。

秋はどんどん深まり、蓬山から少しずつ人は減っていく。そんな時、景麒は麦州から来たという一人の官吏に出会った。

「…中日まで御無事で」

生まれてから何度口にしたか分からない文句を景麒が発した時、その男は少しだけ苦笑するように顔を歪めたが、その後すぐに丁寧に麒麟に礼を取った。その折、景麒は特段することも見つからず、

また周りに人影がなかったことも手伝い、男と少しずつ話をした。

「あなたはどちらから？」

幼い麒麟の容貌に似合わぬ、少々冷ややかな声音に面食らったような顔をした男は、しかしその後には穏やかな笑みを浮かべて麒麟の瞳を見た。

「麦州でございます」

「麦州。地図上では見た事がある。どのようなところか？」

「良いところです」

迷わず一言で言いきった男に、景麒は目を丸くする。

「人も、土地も、官吏も、そして州侯も」

「州侯……」

呟いた景麒に頷いて、男は自信たっぷりに笑んだ。

「私は僭越ながら、麦州城にて官吏を務めさせていただいております。その折、州侯浩瀚様に時折会う機会があるのでございます」

「麦州侯の名は浩瀚というのか。どのような者だ」

「お会いにならないと、あの方の事はお分かりにはなれないかと思えます。それほど、……何と言いますか……、一言で説明はいたしかねるお人柄です」

首を傾げた景麒に、男は微かに声を上げて笑った。景麒は、男に少しずつ麦州の事を聞いた。人の生活、習慣、土地柄等……。人から聞く下界の様子は、彼が書物で得たものと同じ内容のはずなのに、何故だかまるで違う土地のように聞こえた。

男はその茶褐色の眉に、少しばかり憂いを秘める。

「慶国の麒麟であらせられる蓬山公にこのような事を言うのは憚られますが……、いえ、麒麟であらせられるからこそご存じでいてほしいのでございます」

何を言うのか、と景麒は首を傾げた。男は少しだけ臉を震わせ、そして唇を噛む。

「今の慶国は……もはや人が安住できる土地ではございませんぬ」

景麒の背後に控えていた女仙が不愉快そうに眉を吊り上げる。しかし景麒は生真面目に、男を見詰め続けた。

「慶国がきびしい状況なのは存じている」

景麒の言葉に、男は首を振った。

「直にご覧になった事が？」

景麒はぽかんとしてから、いや、と小さく言った。男はその幼い少年の無垢な瞳を見つめ、そして頭を下げた。

「蓬山公。慶東国の民の一人としてお願い申し上げます。慶の民は、王を…良い王を渴望しております。どうか…どうかお早く、貴方様がご自身の王となる方と出会えますよう…」

静かに言われた言葉に、景麒は動揺したように、口を噤んだ。

5.

またも王が選ばれる事はなかった。主を持たぬ慶国の民は、しかし無情にも麒麟の選定を受けぬままに蓬山を去っていった。蓬山は静かで清らかで、そして非常に排他的な場所へと戻っていく。

無念を背負って帰っていく慶国の彼等の中で、王を選ぶことのできぬ景麒を責める者は一人もない。しかしながら良い施政——すなわち落ち着いた安全な国——を求める民の願いが、無言の責めを景麒に重圧として与えていった。

秋が過ぎ、次第に景麒は慶国の事について調べるようになっていった。一部の女仙はまだそこまで学ぶのは早い、などと景麒を真実から遠ざけようとしたが、また一部の女仙は、そのような権限は女仙にはない、と彼女らを止めた。事実、今の慶の現状を考えると後の宰輔となる景麒は慶国のことを知るのに、どんなにはやく学ぼうとしてもはやすぎるという事はなく、むしろ慶国の人間にとっては国の頂点に立つことになる景麒には、はやく自分たちの今の暮らしの実情を知ってほしい、というのが切なる願いであっただろう。

彼は慶国の現状のひとかけらでも掴み取るために、今までとは違った勉強の仕方をした。しかしながら現実を目の当たりにする術はなく、ただひたすら書面上から得られる情報をひたすらに咀嚼し、飲みこんでいった。恐らく人里へ行き、慶国の人々の暮らしを見れば一発で分かる事であったであろうが、しかし万年春のようにたおやかで穏やかな蓬山の暮らしに包まれて育ってきた景麒にとっては充分刺激の強い話であった。

「ねえ」

その半透明のすみれ色の瞳で女仙を振り仰ぎ、その裾を引っ張る。「何でございましょう、蓬山公」

膝について彼の目線に合わせた女仙に、景麒は真っ直ぐに質問を

する。

「何故慶国の人は食べ物を食べる事ができないの？家で寝ないの？」

虚をつかれたように女仙は動きを止める。心底不思議そうに首を傾げる景麒の顔は、子供の無邪気さを残酷なまでによく表していた。生まれた頃から何不自由なく、お腹がすいていてもすかなくとも常に豊かで美味な食べ物が傍近くにあり、疲れていてもいなくとも柔らかく広い牀で寝る事ができるのが、彼の当たり前だった。それ以外の暮らしをしたことがないのだから、彼にそれ以外のことを想像する事は難しい。景麒は未だ六歳、その幼さと育った環境を考えれば、それは当然の事かもしれない。

結局、女仙はその質問には答えなかった。

「…いずれ、景麒もお分かりになられるでしょう。慶の麒麟であらせられる限り、否応なしに」

答えにはなっていない返答に景麒は不満げに頬を膨らませたが、しかし女仙はそれ以上は頑として何も答えようとはしなかった。

その時彼女が何も答えなかった事を、後に景麒は恨み、そして感謝する事となる。

慶国、紀州には、亡国の色濃く、腐敗の滲んだ人里がある。もともとこれは紀州だけの話でなく、今の慶国には既にこういった里がいくつもある。

天災や妖魔が国を襲うのは、王のない国の摂理だ。これは特に一部に限った話でなく、被害の程度の差異はあれど、国全体を襲うものだ。そうでなく、ここでの『腐敗』とは、人の道徳心の欠如の事である。

その最たるものが差別、つまり不都合なものの排除だ。

半獣、そして海客は真っ先に排除される対象であった。満足にも
のも食べる事のない国の人間たちは、真っ先にやり場のない怒りを
ぶつける矛先を見つけたのだ。

耳障りな、不快な高い金属音が辺りに響き渡る。

金属部分が大きな鍬がその場に投げ捨てられる。岩にあたってそ
れは音を響かせ、転がっていく。

「何でこんな簡単な仕事もできない！」

苛立たしげな濁声が響き、そしてその後に空気を乾いた音が震わ
せる。巨軀を持つ無精髭を生やした男の目の前に、一人の小さな少
年が膝をついていた。必要以上に痩せ細った体にぼろきれのような
衣服を纏っている。

「何とか言いやがれ！」

何かへまをしたのだろうか、彼は怒鳴られるがままになっている。
その眼は虚ろな光を灯していた。力任せに殴られたせいとか、その小
さな鼻の穴からは濃く赤い血が滴り落ち、それを拭う気力もないと
いうように体全体が無気力といった雰囲気に覆われていた。

その少年の存在自体が気に食わない、そうとでも言うように、男
は鼻息荒く醜い唸り声を上げ、今度は足を振り上げる。そのまま少
年の肩を男は蹴ろうとしたのだが、それは空を切り、男は体の均衡
を崩してその場でたたらを踏む形となった。

男が蹴飛ばそうとした少年は、別の男——少年といった方が正
しいかもしれない——に抱えられていた。その少年は小さな方の
少年に声をかけ、その少年は小さく頷く。その話している内容が男
には気に食わない。

この二人は海客である。そのせいか男の言う事がほとんど理解で
きず、しかし二人の話している言葉は共通言語のようで、時折背の
高い少年の方が彼にぼつりぼつりと話しかけていた。それすらもが

男を苛立たせた。

背の高い方の少年は美しい容姿をしている。

全体的にすらりとした、男臭さを全く感じさせない細い体軀は褐色の肌に覆われ、顎まですっと伸びる繊細な輪郭線は女性美を含む。その頬を目裏に焼きつく深紅の髪が流れ落ち、見るもの全てをその深い翠色の瞳で貫くように真っ直ぐに見る。

少年——に見えるこの人物の性別が実は女であるという事は男は知っている。

この里に辿りつくまでに色々であったようで——海客は差別される対象であるので、その関係であろう——彼女の警戒心は尋常でなく、一度少女の見目の良さに下品な野心を疼かせ、その寝所まで出向いた時があった。その時の彼女の反応は異常ともいえるほど獣じみていて、顔が腫れあがるほどにまで殴られ、完璧な返り討ちにあつてからは男は彼女にちょっかいは出していない。

そのせいかこの男はこの少女が少し苦手であり、彼女が少年や、他の里の差別の対象者をかばったりすれば、男は舌打ちをして踵を返していた。

少女はその後ろ姿を強い瞳で見送る。そして気力を失くしたように隣で項垂れる少年の目の前にかがみ、無頓着に自身の袖で彼の顔についた鼻血を拭いてやる。

少女は空を仰ぎ見、そして傍近くにいる少年にも分からないような大きな吐息をつく。

彼女の位置から天は遠く、その視界の中では鳥たちが自由に空を遊ぶ。

6.

その景色に常に春を描く、四季を感じさせぬ蓬山でも、しかし当たり前ながら月日は確実に過ぎていく。その時の流れを如実に表す様に、蓬山の主の体軀は、大きく成長していった。

他の麒麟に比べれば彼の成長は遅いようであったが、しかし彼の瞳が孕む一種の冷やかさが、彼を成熟させて見せていた。その鬣は薄闇の中でも淡い光を放つように煌めき、時折風を受けて空を駆けていくその姿に、それを見る者たちは言葉に出来ぬ何かを感じ取る。時折、その彼の聖性を目の当たりにしては、溜息にも似た吐息をつく女仙たちは多かった。

景麒が変わっていったのは、その姿だけではなかった。

成長したとは言え、未だ彼の歳は両手で数えれば事足りる程のもの。本来ならばまだ外に出て駆けまわったり、身の回りのものに興味を示してはあれやこれやと騒ぎ立てる歳であるというのに、景麒が見ているのは既に国そのものだった。

景麒は、自身専用の勉強用の堂室を作らせた。椅子に座れば床には届かぬ足を微かに揺らしながら、景麒は山吹色の睫毛を時折瞬かせながら、書物に目を通しては、さらさらち料紙に筆を走らせる。

何を学んでいるのか、とその机を他者が覗き見れば、慶の農業や林業、流通、経済、法のこと書かれた書籍が横に積んであった。その事実を見た者は、若干の眩暈を感じずにはいられなかった。

その堂室には夜遅くまで灯りが灯っている事も珍しくはなかった。芥瑚や女仙たちは幾度も彼に、「無理をするな」と声をかけ、それに景麒は、ああ、だとか、はい、だとか、曖昧に返事をしていた。静止の声は何度もかけねば彼の耳には入らない。その集中力をさすが我が主、と誇ることもあれば、何と厄介な、と不敬な事を思わね

ばやっていられない日も多々あった。

「景麒」

芥瑚が憂い気に眉をひそめて、麒麟の肩にそつと手を置く。無理をしてはなりません、と薄い唇を動かし言う異形の親に、景麒は一寸目を上へとやってから、うん、と頷いた。それでも本を読み続ける彼に、芥瑚が書籍を取り上げ、高く持ち上げる。

「あ」

小さく声を上げ、景麒はその短く細い腕を、本を取り返すために上に伸ばす。それを窘めるように、芥瑚はその切れ長の瞳をさらに細め、景麒の顔を覗き込んだ。

「駄目です」

「でも」

「駄目です」

二度同じ台詞を言った芥瑚を、景麒は恨めしそうに見上げた。しかし一向に書籍を返してくれない芥瑚に、降参したように息をつく。

「：わかった。寝るよ、もう」

「——お分かりいただき、恐縮でございます」

澄ました声で返事をする女怪の調子に合わせるように、地から空気を震わせるような低い笑い声が響いた。景麒は唇を尖らして床を睨む。

「班渠」

窘めるように景麒は下僕の名を呼び、それから椅子から降りて寝所へと向かった。その様子を見、芥瑚は安心したように笑って景麒の持っていた書籍を机に置く。風を紙が受けて、軽い音を立ててそれは捲れていった。

——差別に関することが、そこには事細かに記載してあった。幼い彼の、少々拙い文字で、少しずつ書きこみがしてあった。

「：芥瑚」

ふと思いついたように景麒が振り向く。話を促すようにほんの少し顔の角度を変えた芥瑚を見、一瞬戸惑ったように俯いた後、もう

一度女怪の顔を見た。

「：半獣や海客は、何か悪い事をしたのかな。みんなに嫌われてしまうような、そんな悪い事を」

芥瑚は目を細めるだけに留めた。女怪は麒麟のこういった疑問に答えを与える役目は持たない。彼等の想いを受け、流していく事のみだった。

「景麒はどのように思われますか」

逆に問いが返って来たことに、戸惑ったように瞬きを幾度もした景麒は、やがて瞼を伏せた。

「：見てないから、分からない」

芥瑚は何も答えない。ただ静かに、寝る前の挨拶を口にした。景麒も、それに静かに声を返す。

景麒が書斎に籠もる日は、少しずつ増えていった。それと同時に、女仙たちに、王について尋ねる機会が増えていった。景麒はその幼さながらに、自身の主を渴望した。その必死さは、今の慶の状態をそのまま表しているように見えた。

また、勉強をするのと同様に、黄海に何度も降りるようになった。女仙らは、あまり頻繁に行ってはならない、あそこは蓬山のように守られてはいない所なのだから、と度々主を諫めた。それでも、景麒はやはり黄海に降りた。そして数カ月おきに、新しい使令を手に入れてきた。

景麒は自分の身と、——そして誰か他の人間一人を守れる程度には、使令の数を増やしていった。

そして、景麒は七歳となる。その歳にしては彼の背は高く、鬣も腰のあたりまで伸びた。少し遠くを見るようなその瞳は、実際の歳よりも、彼を大人びて見せた。

慶国、紀州。王の崩御から既に数年の年月が経ち、ますますの荒廃を見せる。

その少年は、右手から勢いよく攻撃の手が降ってくるのに気付き、反射的に目を瞑った。そうしたからと言ってそれで衝撃を受け流す事ができる訳でもなく、気付いた時には右の頬を思い切り殴られていた。耳にもその手が当たったのか、鈍い音が体の中に響き渡り、一瞬上下の方向感覚が失われた。

何か怒鳴られているようだったが、耳鳴りが体内を共鳴してうまく聞こえない。どうせ聞こえていても彼等の言葉はほとんど分からないのだから、聞き取れないのは大した問題ではない。彼にできることは、被害者の表情を作り出し、悲しげに、しかし決して反論しない事。そうすれば、彼等はいっしか満足して、彼から離れていく。それをじっと待たなくてはならない。

この言葉の通じない世界に来て数年がたつ。訳の分からぬままに奴隷のように扱われ、罵られ、蹴られてきた。そしていつしか殴られる事に慣れてきてしまった。

自分はまた何か彼等が不快に思う事をやってしまったのだろう。しかし言葉が分からぬせいか、いまいち彼には彼等が何を怒っているのかが理解できなかった。

いつもならばじっとその場に蹲っていればやり過ごせたが、しかしその日は違った。周りの大人たちは少年を囲み、その内、いつも少年を殴る男は、いつまでたっても手を緩める事がなかった。目前を火花が散るような衝撃が何度も襲い、腹を蹴られた衝撃で、数日間何も食べていないのに腹の底から異物感がこみあげてくる。胃酸だけを、絞り出すように少年は吐いた。苦しげに呻く少年を気味悪くに見た後、またがなりながら男は少年を殴った。当分それは終わる事はなかった。口の中を錆びた鉄の味のする液体が満ちた。自身

の体から異臭がしている、と少年は思った。

「…何をしている！」

その時、少年が唯一理解する事のできる声が、鼓膜を響かせた。
ああ、赤い髪のお姉ちゃんだ、と少年はぼんやりと思った。来なくていいのに、と。

…自分をかばえば、お姉ちゃんもまた、殴られるのだから。

少年は彼女がどこから来たのかを知らない。

この里に連れられてくる者は、誰もがどこか虚ろな顔をしていて、飢えのせいか痩せ細った体軀さえも重たいというように猫背で歩く。そして彼等を襲う辛い日々を、落ち窪んだ眼を陽の下に晒しながらじっと耐え忍ぶのだ。

しかし彼女だけは毛色が違った。

いっどこにいても彼女がいれば分かる。しゃんと伸びた背筋に、何かに挑むような強い視線。辛い環境にいるのは彼女も同じはずなのに、少年に対し話しかける時、彼女はいつも笑っている。

しかし少年は気付いていた。南国の水面のような美しい翡翠色をした彼女の瞳は、しかしながら傍近くで見れば、濃厚な闇を含んでいることを。

すぐさま足音が聞こえ、彼女が少年の傍に立ったのが分かった。

吐く息を震わせながらその場にしゃがみ、少年を抱え起こす。

軽く彼の頬を叩きながら、意識を呼び起こす様に彼女は何度も少年に声をかけた。

「大丈夫か？」

少年は薄く目を見開く。自分の顔を覗き込む褐色の肌をした少女の顔を確認してから、微かに是の意思を示すように、睫毛を震わせた。

静かに紅い髪の少女は、少年を横たわらせる。自分の襦袢を脱いで、痛みの為か大きく震えている彼の体を優しく包み込むようにか

ぶせた。

そして彼女は男らに目を向ける。見ずとも分かる。彼女の瞳は憤怒に燃えているであろう事が。息を大きく吸い込む音が、その場に落ちる。

「…小さな男の子を、顔が腫れ上がる程に殴り続けて…。それに何の意味があるというんだ…」

彼女の言葉は彼等には通じない。それでも言わずにはいられないのだろう。怒りに震える声音で、彼女は話し続けた。

「見ている限り、あなた方も決して豊かな生活をしているという風には見えない。いや、水準よりも大分低い暮らしを続けているという事は分かる」

だけど、と少女は、唇が切れるほどに強く噛み締め、それから怒鳴るように声を張り上げた。

「…小さな子供をいたぶっていいという理由には、決してならない…！」

分からぬ言語を喋る彼女に対し、男らは不快そうな顔をした後に、一歩歩を進めた。その不穏な雰囲気、しかし彼女は全く怯まなかった。燃える瞳で目の前の男だけを睨み続ける。

背後から、一人の男が少女に歩み寄った。その気配を感じていながらも、少女の視線はやはり、一点を見続けたままだ。睨まれている男は、一種の恐怖を感じた。この状況にあってもなお態度を崩さうとしない彼女が、得体の知れぬものに見えたのだ。

その空気を断ち切るように、鋭い音がした。

彼女は左肩の辺りに重い衝撃を感じ、顔をしかめる。

それから一瞬後に、高熱で焼いた石を押し当てられたような激しい痛みが、その肩を中心に彼女の全身を爆発的に襲った。

ぽたり、ぽたりと、鮮血が滴り落ちる。

「あ…」

大きな刃物で左肩から背中にかけてを大きく切りつけられた少女

は、痙攣したように息と共に微かな声を出す。
その後に、少女の絶叫が響いた。

＊

蓬山。

清らかな水音が、音楽のように鳴り響いていた。泉で身を清めていた、金色の髪をした少年が、はっと空を仰ぐ。何かに気をとられるように、菫色の瞳を大きく見開いて一点を見詰め続ける。

「…景麒？」

傍近くに控えていた一人の女仙が、首を傾げ、主に声をかけた。
しかし、少年は、じっとその場を動かない。

少年の唇が、微かに動いた。

声にならないその言葉が、空気に溶けて、置き去りになる。

——行かなくちゃ。

「蓬山公？」

怪訝に思った女仙が立ちあがる。どうしたのですか、と彼の肩に軽く手をかけようとして、その手は少年の体をすりぬけていった。

女仙の目の前で少年の体は溶けていった。刈入れ時の田畑のような黄金に染まったその一角が、一筋の風となって一瞬で消えていく。
気付いた女仙がはっと振り向いた時にはもう遅かった。

空を駆ける一頭の月の色をした四肢を持つ獣の姿は、既に遠い空の中で小さくなっていった。

小さな小さな神の獣は、ただひとつの存在を目指し、駆けはじめたのだった。

7.

虚空を走るその獣は、風の流れさえ遅く感じていた。何もかもが自分には追いつけない。幼い少年は、自分がこれだけ速く走れる事をはじめて知った。

あの声が聞こえた日から、ずっと気になっていた。薄くぼんやりと、だが決して途切れない東にいる『あの人』の気配。しかしこれ程までに『あの人』に呼ばれていると感じるのは初めてだ。もしくは、景麒自身が傍に行きたいと懇願しているのかもしれない。

———景麒、お戻りくださいませ。

姿をあらわせばたちまち置いて行かれるからであろう、景麒の影に溶けたままの状態で芥瑚が必死に景麒を静止する。だが彼には聞こえない。耳も、目も、鼻も、体の神経全てが、向かう方向へと集中していく。

足は少年の意識下で動く。鳥が滑空するよりも滑らかに、一頭の獣は一筋の光となって凄まじい速度で進んでいった。

重く鈍い音を出して扉が閉まり、鍵がかけられる音がする。体重の軽い足音が響き、無造作に横たわった少女が、小さな気配を感じ取る。

「…お姉ちゃん」

心底心細そうな声が聞こえてきた。彼女が薄らと目を開けると、こちらを覗き込んでいる少年の姿が見えた。

どうしたら良いのか分からないのだろう。眉尻を下げてしきりに

瞳が左右に揺れている。

大丈夫だ、と手を伸ばして彼の頬を撫でてやろうと思ったが、腕がひどく重くて持ちあがらない。自分の体なのに意識の他は全て異物に感じていた。体がひどく熱いのに、震えが止まらない。芯から噴き出るような汗がつたうと、それが恐ろしく冷たく感じる。熱いのか寒いのか分からない。目を開けている事さえ辛かった。

少女が、自分が横たわっている床を見れば、そこには何かぬめりとしたものが広がっていた。薄い暗闇の中で、赤黒くてらついている。閉じ込められた場所の窓の隙間から微量に入る光がそれを映し出し、少女はそれが自身の血なのだと気付く。

頭から何かが抜け落ちて行くような感覚だけが妙に明確に分かる。薄い霧がかかっていくように視界は徐々に狭まっていき、彼女はうまく視点を一点に定める事ができない。

見るからに衰弱していく少女の様子を見て、傍で彼女を見ていた少年はいよいよ混乱する。

彼はいつも里では無気力だったが、しかし自分をいつも助けられていた存在を見捨てる程、心が荒んでいる訳でもない。

痙攣するように震えている彼女の手を握る。

「お姉ちゃん……」

呼んでも、彼女は返事ができない。聞こえている事は聞こえているのだろう、彼の手を握り返してくれた。しかしながらその力はとても弱い。

口元にあてた手に当たる息は非常に微弱で、少年はどんどん不安になった。ぎゅっと強く彼女の手を握り、少年はどこかにいる誰かに願った。

どうか、彼女を助けて、と。

少年の願いはむなしく、時間だけが過ぎて行った。日は暮れ、蔵の中はどんどん暗くなる。震えているためにかちかちと鳴る彼女の歯の音と、力が抜けていく指先だけを感じながら、少年はこみあげ

てくる嗚咽を必死に堪えた。

「…さすがにまずいんじゃないのか」

血を大量に流す少女を蔵へ放り込んだ後、その付近で数人の男が集まって話をしていた。少女を切りつけた男は、人間の肉を切る生々しい感触にさすがに寒気がしたのか、先程から神経質そうに体のどこかしらを、しきりに動かし続けていた。

「だから、海客の為に手当をしてやるっていうのか。冗談じゃねえ、あんな疫病神共、死んだところで誰も構やしねえさ」

最初からこうやれば良かったんだ、と妙に大きな声を出した男は、腕を組んで明後日の方向を見る。しかしやはり動揺しているのか、男の息は少々荒かった。

辺りは暗くなり、東から藍色に空は染まっていく。西の空の茜色に染まる部分があと僅かになったところで、一人が声を上げた。

「…あれ、何だ…？」

その男は辺りを覆っていく闇の向こうを見ていた。その方向には藍染めの色の空があり、そしてひとつの星があった。それは少しずつ動いている。

「流星…か？」

しかし流れ星にしては動きが遅く、そしてただの星にしては動きが速い。一点を見詰め続ける男に気付いた他の人間達が、つられるようにその星に視線を向けた。虚空の闇に、いやに明るいそれは、瞼の裏に鮮烈に焼きつく。

動き続けている星は、こちらに近付いてきているようであった。

そして、一人の男が声を上げた。

「…獣…？」

月明かりよりも明るいそれには四肢がある。その全貌が見えてくるに従って、里の人々は声が紡げなくなった。

仔馬程度の小さな体軀は闇の中でも光を放ち、その四肢は淡い金色に染まる。風を受けて、秋の田畑の色をした鬣が靡く。誰もが知る、しかしほんの少数しかその姿を見た事がないというその獣は、真っ直ぐにこちらに向かってきていた。

「嘘だろう…」

どこからともなく、愕然とした声が聞こえてくる。空を駆ける獣を見て、唇だけが勝手に動いた。

——何故、麒麟がここにいる。

呟いた声は、闇に吸い込まれていった。

不思議な心持で、小さな麒麟は走っていた。

微温の湯にゆったりと浸かっているような緩い心地良さと、自分では処理しきれない程の沸き立つ感情。それが「嬉しい」という感情だ、と一言で言ってしまうには、それはあまりに複雑だった。

一方で、自身の最も苦手とする匂いがしている事も気が付いていた。血、そして呪詛、そのふたつが蠢いている場所へと自分は踏み入ろうとしている。体が必死に引こうとしているのに、本能に近いところで自分が、しきりに「行け」と言う。

行け、と。今行かなければ、絶対に後悔するのだから、と。

これが麒麟なのか、と妙に客観的な自分もいた。

今自分が向かう先に何があるのかを景麒は具体的には知らない。それでも、見えないし聞こえない——言うなれば第六感的な何か——に突き動かされるようにして空を走る自分は、紛れもなく人ではないのだと、頭のどこかで知らぬ誰かが言っていた。

目的地に近いことを本能で感じ取った景麒は、地上に目をうつす。
——…これが、人の住むところ、なんだ。

荒れた地は、春夏秋冬常に花咲き誇る景麒の生まれ育ったかの土地とは、似ても似つかなかった。

どうして、花が咲いていないのか。地に降りた事のない景麒はそれすらも分からない。書物によって国の政治や経済や法について学び、自身の知識として得たはずなのに、景麒が読んだどの本にも、「地上には蓬山のように花が咲かない」などとは、書いていなかった。

景麒が一足空を蹴れば、ぐんと土に覆われた大地が近づいてくる。そして、「あの人」の気配——その人の発する何か空気のようなものが、より濃密に感じられるようになった。

生えている木の数が判別できる程度の距離まで近づいたところで、景麒は一度速度を緩めた。そばにいる女怪が景麒をなだめるように声をあげた。

「景麒、なりません。これより先はお体に触ります」

そのような事は景麒が一番分かっている。この先に進む事を、目前に見える土地を、体全身が拒否しているのが分かる。立ち昇ってくるつんと鼻をつく血の臭いは激しい頭痛を引き起こし、それ以上にその人里にまわりつく憎悪や呪詛の気配は、すぐさま逃げ出してしまいたい程の嫌悪感を景麒に与えた。

——でも。

「あの人」は、この先にいる。

そして、その気配がだんだんと希薄になりはじめている事も気付いていた。血の臭いさえも凌駕してしまう程景麒を惹きつけるその存在は、そこにあるという確信が彼にはある。

景麒は一度足を緩めたが、しかし止めはしなかった。里の人間が呆然と自分を見上げている事が分かったが、もうその対象はすぐ近くにいるから、景麒はそれには意識を向けない。ひたすらに、足を動かし続けた。

すぐさま大地は目前に迫り、景麒は生まれてはじめて、下界と呼ばれる地に足を降ろす。蓬山とは似ても似つかない、固くて荒い土の感触を、その冷たさと共に感じた。目の前には恐れとも驚愕とも言える表情で自分を見つめる人々がいて、そして自分に寄生虫のようにまとわりつく、潔癖で幼い景麒にとっては吐き気のするような人の汚い念や恨みや憎しみが蠢いていた。

眩暈でふらつきそうになった景麒は、こみ上げる嫌悪感を押さえながら、それでも一步一步血の臭いが強い方へと歩を進めていく。

自分が世界で一番嫌っている臭いのはずなのに、何故かそちらへ向かわざるを得ない。それ程までに、「あの人」の気配は強く、景麒にとってはその気配は何にも勝る魅力だった。

目前には小さな蔵があった。薄汚れたその場所から、漏れでるような光がある。目に見えるものではなく、ただ体全身で感じ取るのだ。どこか懐かしくて愛しい、そして少し恐れを感じさせる、闇に包まれた仄かな光を。灯火にも似たその存在こそが、血の臭いを発している大元だと景麒はそこではじめて気付いた。

近寄りたくないのに、側にいたくてたまらない。なんと不思議な心地なのだろう。

景麒は蔵の前に立つ。透明感の強いその瞳で扉を見つめる景麒に、声がかかる。

「景麒。この先は駄目です。これ以上は」

制止の声はしかし景麒の確固たる意志によって阻まれる。

「芥瑚。ここを開けて」

幼げな声は、ふらつく体に似合わず、しっかりとした音を発した。「なりません」

女の声は子供に負けじと、語調の強さを増した。小さな獣の目が、一度だけひたりと地面に向けられる。

「芥瑚」

強く彼女の名を呼んだ彼は、そして再度扉へと目を移し、そして

自身を育てた親に、命令をした。

「芥瑚。――ここを開けよ」

地中で蠢く女怪の気配が一時止まったのが感じ取れた。少しの間を空けて、地中から羽毛に覆われた手が伸び、戸惑いがちに簡易式の鍵を開ける。

景麒の目前にて、暗い室内への扉が、重い音を立てて開いた。

開いた扉の前にいたのは、まず怯えた顔をした少年だった。景麒を見て、くりっとした大きな目を、さらに見開く。

そして、その少年がかばうようにして、倒れている少年、否、少女がいた。

中性的な容貌をしたその体軀はやせ細ってはいるが決して貧相ではなく、整った顔立ちが褐色の肌に覆われているのが印象的な少女だ。

景麒がまず惹かれたのは、その紅い髪だった。まるで夕日を水面に映す大河のように流れるそれに導かれるように、景麒は一步足を前に出す。

しかしその紅い髪に見惚れていたせいか、その紅い河の一部が血であることに気付くのが一瞬遅れた。流れている血、そして青ざめた彼女の顔が、それが彼女が流したもののだとすぐに分かる。少女は、景麒の目から見ても、かなり衰弱している様子だった。

――このままだと、この人は死んでしまう。

猛烈にそれは嫌だと本能的に感じた。この人が死んでしまうならば、自分が死んでも良いとまで思った。

この少女は、景麒にとって初めて会う人だ。だから景麒がそこまでする必要はない。

不可解な感情にのまれるように、景麒は一度蹄で床を引っかく。かすかな砂利が擦れるような音がした。

目を覚ましたのか、それとも元々覚めていたのか、彼女の指先がぴくりと動く。景麒は、そんな些細な動きさえも、感覚的に分かっ

てしまう。

瞼が動き、濃厚な紅い色をした睫毛が微弱に震えて動く。

ゆっくりと瞼が開かれ、景麒は、彼女の瞳を見る。

——その瞬間から一時、息が出来なかった。

深い森が新緑に染められていくような、もしくは恐ろしく透明感の高い海をのぞき込むような。言うならば、永遠の色をしている、と思った。

それがどういう意味なのか、景麒は自分でもよく分からない。ただ、永遠というものがこの世に存在するならば、彼女の瞳のような色をしているに違いない、そういった確信があった。

惹かれて、一歩ずつ、ゆっくりと進む。

気圧されたように自分を見る少年は、思わず後ずさる。その為、景麒と紅い髪の少女の間は、何もなくなった。

彼女の体から流れる、赤黒い血。景麒にとってはおぞましい程の強烈な臭いのするそれを、景麒は次々と襲う目眩に耐えながら、ゆっくりと膝を折る。

まず、蹄が血に当たった。

「景麒」

女怪の制止が入る。主が弱っているせいか、声に力がない。

そして折った膝が血に沈む。体中から汗が噴き出すが、不思議と逃げだそうとは思わなかった。

そのまま景麒は瞼を閉じ、ゆるり、と首の角度を下へと向けた。全身が床につく。

床の血溜まり。それに、緩慢に、細い景麒の角が浸されていく。猛烈な吐き気が襲っても、景麒は顔を上げない。

目の前には一人の少女がいる。

この人が、「あの人」。

景麒は、自身の内側から溢れでる想いをそのまま言葉に乗せた。永遠の忠誠を。ずっと側にいると誓う事を。敬愛の印を。

その人が、自分の王様だ、という事を。

——許す、と言われるまで、幼い獣は決して顔は上げない。

8.

自分の前にひれ伏した獣を、少女はじっと見つめていた。黄金色に染まる体躯を、少女の流す血に浸かるようにして膝を折る。その馬にも似た小さな体躯を持った美しい獣は、その瞬間からみるみるうちに衰弱していくように見えた。

故郷の神話に出てくる獣みたいだ、と少女は思う。力で制するのではなく、その美しさや聖性で見る者を凌駕し、圧倒する。在り方はひたすらに静かで、優しく、しかし、だからこそその過剰な潔癖とも言える神性が、人を時に、恐れさせる。

少女は、この世界を何と呼ぶのか知らない。自分の故郷とはまるで異質であることは気付いているが、少女と話をできる者でこの世界について十分に教えられる者はいなかった。

もうあれから一年経つだろうか。気が付いた時には見慣れた街並みは消え、広い海岸に流れ着いていた。自分の体は全体的に傷ついており、少し動かすだけでどこかが痛んだ。その時、視界におさまりにきらない範囲に大量の瓦礫が散乱していた。とにかく歩いてみて、そして出会った人々は、自分と話が通じない事を察すると、何故かとても辛く自分に当たった。

水面に映った自分の姿を見た時の驚愕。赤茶色と言える程度だった髪の色は噴き出す血のように真っ赤で、自身の瞳は化け物のように深い緑色をしていた。肌の色さえ変わり、顔形も変わってしまった自分を見た時の絶望は、今でも思い出して気持ちの良いものではない。

それから二月くらい経った頃、この世界の人間たちは、自分たち——つまり話の通じない者たち——が嫌いなのだと知った。

それを知った時、少女はそこまで残念には思わなかった。元々自分がいたところでも、彼女はまわりから好かれていた訳ではない。

周囲の人間の顔色ばかりを窺っていた自分の事を、周りがどう思っていたか、何となくだが知っていたからだ。

しかし嫌われるだけならばまだしも、時に暴力を振るわれ、最低な時には殺されかけたり、もしくは女として襲われそうになった。おぞましい程の欲にまみれた人間の目にさらされた時に、彼女は「少年」として振舞うことを決めた。その時から、彼女は話し方や在り方を変えざるをえなかった。

保身の為とは言え、偽りを通して生きるとは、辛く悲しかった。自分の存在が今世界のどこにあって、そして自分が何をしたいのかも分からず、それどころか明日どうなるかさえも分からない。

会う人々に頭を下げながら、内容がよく分からないままに働いてみたり、野に泊まったりした。――とても、みじめだった。

しかしその虚無感すら感じられる余裕があるのが、幸せだという事を知った時があった。巨大な怪物のような獣に会った時だ。

見た事もないような巨大な牙から滴り落ちる唾液や荒い息、黄金色に光る瞳や裂けた口、それが一体何なのかも分からず、少女は必死で逃げた。

まわりの人間が皆泣き叫んでいた。阿鼻叫喚の嵐とはああいう事を言うのだろう。彼等が叫ぶのを聞くまでもなく、あの獣らがとても危険である事など一目瞭然だった。

足がもつれて転げそうになりながらも必死で逃げている時に、ひとつの断末魔が聞こえた。反射的にその方向を見てしまった事を少女は悔いた。

一人の女の腹が、まるで煎餅か何かを齧った後のように、なくなっていたのだ。血が大量に噴き出すその部分から臓物がだらりと垂れ下がり、その女は血の混じった白い泡を噴きながらゆっくりと倒れていった。ぐにやりと有り得ない方向に曲がって横たわる女の横では、粘性のある不快な音をたてながら、肉と骨を噛み砕いていく一匹の怪物がいた。

込み上げる強い酸に耐えきれず、少女はその場で吐瀉した。あの時目裏にしっかりと焼きついた衝撃的な光景を、今でも少女は夢に見る。

あの場合をどうやって逃げ出したのかは覚えていない。気付いた時は川のほとりで気を失っていた。

明日も生きている事ができるかどうか分からない、そんな世界で生きなければならないのか、と思うと、唇から乾いた笑いが漏れた。

街を転々とし、足が棒のようになるまで歩き続けた。何が楽しいのかも分からないのに、そうまでして生きようとする自分が、心底卑しい存在に感じた。しかしそれを恥じる余裕すらなかった。

時折硝子窓や鏡や、もしくは雨の雫が降りだした水たまりに映った自分の顔を見て、自嘲の笑いを漏らす事があった。――なんと、自分にふさわしい、醜い容貌だろう、と。あの化け物たちと何ら変わらない、異様な程鮮やかな紅い髪と翠の瞳。肌の色さえ、生まれ持ったものと違う。

自分は、誰なのだろう。そう思った。

それから何度か化け物と遭遇したり、もしくは自分を嫌うこの世界のの人に殺されそうになったりした。誰を信じていいのか分からず、それならば、誰も信じるまい、と思った。

そうした時、自分のような――つまり、言葉が通じない世界から来た者達――を受け入れているところがあると知り、そこに足を向けた。多くを望んだ訳ではない、少しの食事と、当面の宿がわりにでもなればいい、と思ったのだった。長く滞在すれば、どうせ誰かの慰みものにされそうになったり、あらぬ憎しみから殺されそうになったり、そうなるに違いない、と思ったのだ。

荒んだ目をしてその里に足を踏み入れた少女を、その里の人々は笑顔で迎えた。少女も挨拶を返しながら、思った。これほどまでに

友好的なのは、何か訳があるのだろう、と。

彼等は、愚鈍だった。少女はそれまで、毎日何かに怯え、何かがあった時に備えいつでも逃げれるように準備し、誰も頼らなかった。その彼女から見れば、彼等は恐ろしく無防備で、愚鈍で、緩慢で、そして開放的だった。

落ち窪んだ目をした少女にしきりに話しかけ、子供らは少女にまわりついた。鬱陶しげに彼等から視線を外すと、子供らは突如泣き始め、その扱いに困って時折少女は途方に暮れてしまう事がしばしばあった。

老人も、彼女の両親程度の人々もいた。時折彼女の世界の言葉が分かる人がいて、少女はその人たちと話をした。彼等はこぞってこう言った。――この里の人たちは、温かいだろう、と。その度に、彼女は苦く笑ってこう返した。あんなの、騙そうとしているに決まっている。そう言う、と、決まって彼等は不可解そうな顔をした。

ある日、同じように、やはり同じ言葉を喋る女が「彼等は温かい」と言って、そして少女は「信じない」と言った。その瞬間目の前に火花が散った。頬を叩かれたのだ。それも何度も、何度も。

激しく怒鳴られた。あれだけよくしてもらっているのに、お前は屑だ、塵だ、どこかに行ってしまったえ、と。

その言葉に、単純に驚いた。

――よくしてもらっている。

そんな考えは、浮かびもしなかった。ただ、彼等は自分を裏では嘲り、嫌い、憎しみ、そして最後は殺されるのだ、と、そう思っていた。それしか思い浮かばなかったのだ。

その日から、少女は、時折里の人に話しかけてみる事をしてみた。子供たちは単純に喜び、彼女にたくさんものをくれた。それは大抵がらくたで、石ころであったり、草であったり、小さな虫であったりした。その贈り物を見つつ、久々に口元を動かして礼を言い、そして口角を上げてみた。長らく使っていなかった頬の筋肉がひきつり、妙な笑顔になったと思う。

それでも、と少女は思った。
まだ、笑えるから、大丈夫なのではないか、と。

それから、またその里を出た。いればいいのに、と彼等が思っていてくれる事は仕草や態度で分かったが、何となしに、自分の居場所はどこではないと、そう思う時があったのだ。

相変わらず人は自分を騙そうとし、夜になれば今までに見た壮絶な光景にうなされ、やはり苦しい時が続いた。そして今に至る。

自分はこれからも、ただ生きるために生きるのか。それが分からない。

ただ、目の前に伏せる、衰弱した、しかし小さな綺麗な生き物を見て、このようなものが見られるのならば、やはり生きているのも悪くはない、と思うのだ。

ふと、獣から聞き慣れた言葉が聞こえた。少女の国の、言葉だった。

何を言っているのか分からない。朗々と歌うように言うその声音は幼い少年のもので、少々舌足らずに聞こえるのが、霞みがかかった頭の中で反響する。必死な少年の声音が、少し可笑しかった。

「：許すと、言って下さい」

その獣は言った。不思議な事を言う、と思った。自分が誰かを許すなど。――許してほしいのは、いつだって自分だというのに。

もう一度、獣は言った。

「許すと、言って下さい。でないと、あなたは、死んでしまう」

――許すと言ったら、生きていられるとも言うのか。

心の中で、少女は苦く思った。それを言うだけで、このように辛い思いをせずにいられるのならば、そんなもの、簡単だ。

乾いてかさかさになった唇を動かして、少女は目を閉じながら、一言発する。何でもない言葉、しかしながら、それによって彼女の生涯が決められてしまう言葉を。

三文字の言葉が少女の唇から発せられ、その後、彼女は、意識を手放した。

長らく感じていなかった眩しい光を瞼の上に感じた。白く光る周囲が、心地良い風と共にさわさわと耳元をくすぐる。柔らかい空気に誘われるように、少女はゆっくりと目を開けた。

まず見えたのは白と明るい青を色調とした、精巧な彫刻が施された天井。描かれているのは、花模様を基調とした、規則的でありながら決してくどくはない文様であった。泉か川のような水の流れのある所が近いのか、どこから静かな水音が絶えず聞こえてくる。鳥の鳴き声が歌うように響いているのを聞いて、少女はこの事を、死した後の世界かと思った。それほどまでに、少女がそれまで過ごしてきた環境とはかけ離れた静けさと穏やかさが、ここにはあった。不思議な心持で腕に力を入れ、体を起そうとした時に、左の肩から二の腕にかけて激痛が走る。

「あっ……」

力無い声を残して少女は倒れ込んだ。一気に汗が噴き出てくる。ゆっくりと体勢を整えるように牀に横たわり、もう一度天井を見ながら、深呼吸をした。

ここはどこなのだろう、と汗がひくのを待ちながら紅い髪を真っ白い敷布の上に散らした彼女は、ぼんやりと思った。その時に、はつきりとした女の声が彼女の耳に届く。

「お目覚めでございますか？」

問われた言葉に、はっと少女は身を固める。顔を向けた先にいるのは、色鮮やかな襦裙を纏った一人の歳若い女であった。身構える少女に対し、宥めるように笑いかけ、そして牀の横まで歩み寄る。傍にある水差しから茶杯に水を少なめに注ぎ、少女の首だけを抱え起こし、ゆっくりと飲ませてくれた。ただの水であるはずだったが、乾いた喉にそれは少しだけ甘く感じる。

「痛みがまだひどいものではございませんか？」

「…ええ、まあ」

警戒しているのか少女の答えはそっけない。それを気にした風でもなく、女はゆったりと微笑みながら、少女の傍に控えるように立った。その礼儀正しい所作が、少女には居心地悪かった。

「…あの…、どうぞ、座って下さい」

ぎこちなく傍の椅子を指し示す少女に、しかし女は存外しっかりと首を振った。

「私は一介の女仙に過ぎませぬ故、貴女様がそのようにお気になさる必要はございません」

「女仙？」

眉を寄せて見上げてくる少女の額は、痛みのせいか汗が滲んでいる。それを丁寧に拭き取りつつ、女は頷いた。

「神々の住まう地のひとつ、蓬山に仕える仙のことを女仙と呼ぶのでございます」

「神々…？」

訳が分からない、というように眉を寄せる少女に、しかし女は笑うだけで何も答えない。吐息をついた少女は、話の接ぎ穂を見つけられずに俯いた。しかし頭をひとつの懸念事項が過ぎり、はっと顔を上げた。

「彼はどこにいますか？」

「彼？」

少女はその深緑の瞳で女を見据える。

「私と一緒にいた少年です。十歳くらいの子」

ああ、と頷いた女は、安心させるように掛け布を握りしめる少女の手を、入った力を解していくように、綺麗な手で柔らかく包んだ。「大丈夫です。一時的に雁州国で保護してくださるそうなので」

「雁州国？」

「しっかりとした、安全で豊かな大国でございます。当面のところは御心配なさる必要はないかと」

そうですか、と力を抜いた少女の瞳は、しかし当たり前ながら疑

間に満ちていた。もつとこの世界に関する知識が必要だ、と女は思う。

あ、とまた思う所があったのか、少女は顔をあげた。

「貴女は…私の言葉が分かるんですね」

一瞬虚を突かれたように動きを止めた女は、その後苦く笑った。

「貴女様はもう誰とでも会話がお出来になりますよ」

少女は瞬く。言われた意味がすぐには分からなかった。

「何故？」

「契約を結ばれて仙におなりあそばされました故」

「仙…？」

何が何だか分からない、と少女は額に手を当てた。少し頭を動かすだけでひどく重くて、思考力が落ちているのが分かる。体は肩を中心として、鈍く痛む。

そんな彼女の様子をすぐに悟り、女は彼女の肩にそっと手を置いた。

「とりあえずは、お休みになられる事が必要です。はやく元氣になられませ。…慶国の民は、ずっと貴女様をお待ち申し上げておりました」

「…え？」

きょとんと目を見開いた彼女に笑い、そして一礼をして女は下がついていく。女の発言の何もかもが分からず、質問で埋め尽くされた彼女の頭は当然ながら整理されていない。

それでも急激な眠氣が彼女を襲う。うまく働かない頭の中で、それでももうひとつだけ、確認したい事があった。

「あの」

声をかけると、女はゆっくりと首を彼女の方へと向けた。今まで出会って来た人とは動作の速度がまるで違い、少女はその度に戸惑う。

「あの、金色の動物…鹿みたいな…。あの子は、大丈夫なんですよ。か…」

少女の言葉に、今度こそ啞然と口を開いた女は、その後溜まった息を吐きだすように笑った。何かおかしい事を言ったのだろうか、と首を傾げる少女に対し、失礼を致しました、と折り目正しく礼をしてから、女は目を細めた。

「貴女様をご覧になられたのは景麒です。動物ではなく、麒麟でございます」

「…きりん？けいき？」

「貴女様は、あの方の事を、景麒とお呼びになるのがよろしいかと…。さ、もうお休みなさいませ。景麒が元氣をお取り戻しになられたら、またゆつくりとお話出来る事でしょう。今は、養生なさいませ」

そうして女は一礼をし、今度こそ堂室を出て行った。

静かな室内に取り残された少女は、心細げに身じろぎをした後に、また深い眠りへと落ちて行った。

「…角を血に浸した!？」

金切り声とも言える声が響き、一人の女仙がもう一人の女仙の口を塞ぐ。はっとしたように口元に手を当てて咳払いをした彼女は、真っ青な顔色をして寝込んでいる景麒の方へと目を向け、そして溜息をついた。

「それは確かなのか」

「景麒の不調の原因を芥瑚に尋ねれば、そう返してきました」

「今は芥瑚は」

質問に、女仙は頬に手を当てて首を横に振る。

「景麒があのだ調子です。もう今は話す事も辛いです」

その言葉を聞いた年長の女仙は、額を覆うように手を当てながら、ゆるりと椅子へと腰を下ろした。

「何と言う無茶を…。景王君が血に塗れていたとは言え、血を避

ける方法はあったらうに：」

少々苛立ちを孕ませた呟きに、女仙は苦い顔をして景麒を見た。時折呻き声を上げて寝がえりを打っている。

「…何となくですが、私は景麒が、わざとやったのではないか、と思うのです」

怪訝そうに目を上げた女に苦笑を返し、「理由は分かりませんけれど」と小さく付け足す。

「…ただ、何となく、そうなのではないかと」

静かな会話は当然ながら、寝込んでいる小さな麒麟の耳には届かない。

やや不規則に息をする景麒の唇が微かに動く。何かを呼んでいるような動きだった。

汗の滲む子供の頬には少しずつ、赤みが戻りつつあった。

景麒はいつもと同じところで目覚めたはずだったが、しかしいつもの目覚めと、何もかもが違った。

特段目に入る景色が変わっているといった事もなく、どちらかと言えば少々気分が悪く、起き上がろうとすると眩暈がした。

それでも、体が沸き立っているのが分かる。何か良い事が待っているような、満たされていて胸が苦しい、そんな心地だった。

「…芥瑚」

女怪を呼んで、牀から降りようとする。掛け布を捲って足を下ろそうとしたところで、女怪から返事がないのを訝しみ、景麒は自分の足元を今一度見た。

「芥瑚」

もう一度呼べば、今度は白い手が出てきて景麒を手伝った。しかしいつもと比べて格段に遠慮がちな仕草だった。どうしたのか、と景麒は首を傾げる。そしてさらりと流れる鬘を後ろに流して顔を上げれば、——その人がいた。

景麒は息を止める。

「…具合は？」

少し低めの声に尋ねられ、景麒は一瞬答える事が出来なかった。何故すぐに気付かなかったのか、教えてくれなかった芥瑚を心の中で軽く罵倒する。

はじめて見た時と変わらず、彼女の深い緑色の瞳は景麒を震えさせた。震撼、と言っても良いだろう。

自分の心配をしているのだろう、首を傾げて彼女はこちらを覗き込む。景麒は自身の体調を尋ねられていた事に思い至り、慌てて返事をする。

「あの…、だ、大丈夫です」

そうか、と目を細めて少女は笑った。そして、初めて彼女を見た

時に着用していた簡素でぼろぼろな衣とはまるで違う、滑らかな絹の衣を揺らしながら、こちらへと近づいてきた。数歩近付いた時に、微かに匂った嫌な臭いに、思わず景麒は顔を顰める。それにすぐに気付いた彼女は、また数歩下がった。

「ごめんね。厭だった?」

何故謝られたのか一瞬分からなかった。自分が表情を変えたから彼女が距離を取ったのだと気付き、景麒は半ば泣きたくなる。もっと、近くに寄って欲しかった。けれどさすがにそこまでは素直に言う事ができず、口の中で小さく「いいえ」と言った。

「君は血の匂いが苦手なんだと聞いた。君と話がしたいんだけど、この距離なら大丈夫?それとも、また今度にする?」

聞かれて景麒は必死に首を横に振るう。東でずっと自分を呼んでいた人、その人が目の前にいるというのに、微かに鼻をつく程度の匂いの為に、その機会を失くしたくはない。

「大丈夫です」

気丈に振舞うために、いつもよりも大きめの声を出した。顔を上げて真っ直ぐにその褐色の肌に覆われた顔を見る。気遣わしげに細められていた目が優しく緩み、それを見るだけで景麒の胸には春がきたような心地になる。

「はじめましての時はあんな姿だったのに、今は人なんだね。お伽話の中の生き物みたいだ」

口角を上げ、少女は手近な椅子に腰掛ける。ゆったりと笑う様は、景麒が知る誰よりも、気品があるように見えた。

「:こんなに小さな子供だったんだね」

窓から入った風が、柔らかい陽の光を浴びて緋色に染まる髪を飛ばす。それが頬にかかり、少女は指に引っ掛けてそれを後ろへと流した。その手で自分の頭を撫でてくれないかな、と心の奥底で願っている自分に気付いた景麒は、慣れない想いに戸惑ってしまう。

「名前を、景麒というと聞いた」

自身の呼称を唇に乗せた少女に、景麒は視線を左右に揺らした後、

躊躇いがちに口を開いた。

「景麒は、名前ではございません。慶国の麒麟だから、景麒です」少女は、よく分からないというように眉を寄せた。

「景麒と呼んでは、いけないのかな」

はっとした景麒は、慌ててぶるぶると左右に顔を振った。

景麒の反応を受けて花開くように笑った少女は、じゃあそう呼ぶね、と朗らかに言う。その笑顔に見惚れていた景麒の耳に、少女のやや低めの声が、柔らかく届いた。

「わたしはね、陽子というんだ」

「…ようこ、さま」

伝えられた異郷の耳慣れぬ名を、舌の上で転がす様に景麒は復唱した。そう、と陽子は微笑と共に頷く。桜色の唇が、静かに動いた。

「太陽の陽に、子供の子。それで、陽子」

そう言って、まさに太陽の光を現したような髪をなびかせて、少女はことりと顔の角度を変える。景麒は、その様に、また見惚れた。

*

青い鳥が風に乗るように羽ばたいていく姿を、陽子が視線で追うのが分かった。見ていなくても、その気配で何をしているのかが何となく分かってしまう。横に感じる確かな光のようなもの、それを感じては景麒は微かに恍惚とした。何と不思議なものなのだろう。王気というものを話で何度も聞いてはいたが、実際に体感してみなければ、——これは分からない。

「外に出ても大丈夫だったのか？」

はい、と景麒は頷く。未だ少し距離は取ってはいるが、そこまでに重みは感じない。体調はまだ万全には遠かったが、それでも二人でこうして静かに歩くのを幸福と感じた。

陽子という名を持つ美しい少女の目前には、一面の花畑が広がっ

ていた。鮮やかな緑色の葉の絨毯の上に広がる、桃色、赤紫、青、橙色、百の色彩を持つ視界に収まりきらない色鮮やかな景色に、陽子は溜息をついた。

「…やっぱり、天国なのかな…」

呟かれた言葉は、景麒にとって分かるようで分からない単語だった。てんごく、と唇を動かすと、意図せずに声が零れ落ちた。陽子は景麒を見下ろして、眉尻を下げる。

「天国を知らない？」

存じません、と景麒は言う。

「…子供には、言わない方が良い事なのかな…」

「そんな事はありません」

景麒は即答する。彼女が教えてくれるのならばどんな事でも知りたいと、未だ世の汚れた事を何も知らぬ純真さで、真っ直ぐに陽子を見上げた。その視線に、知らず陽子の口からは苦笑が零れる。

「えっとね、死んだ人がいくところのこと。綺麗なところで、花がたくさん咲いているんだって」

景麒は眉をひそめる。

「それならここは天国ではございません。貴女は、死んではおりません」

ぽかんとした表情で景麒を見た陽子は、その後に息を漏らす様に笑んだ。そうだね、と少し掠れた声が耳元を擦る。

暫く、二人でゆつくりと歩いた。足の裏に柔らかい土の感触が残る。芳しくありながら決して濃くはない花の香りが鼻孔をくすぐる。世の子供らと変わらず、少し頼りない足取りの景麒に合わせて陽子が歩幅を狭めているのには、景麒は気付かない。随分としっかりした受け答えのできる大人びた子ではあるが、しかし真横を小さな羽音と共に飛んでいく虫に気を取られたり、小さな石に蹴躓いて転びそうになっていたりするところは、やはり彼の幼さをよくあらわしている。

「ねえ」

陽子は景麒を呼び掛ける。はい、と陽子を見上げた景麒の背に合わせるように、陽子は膝を折った。

「あの時言っていた言葉は、なあに？」

あの時、と言われて景麒は契約の時の事だとすぐに分かった。あの時の、世界が折れ曲がるような不快な気分 of 悪さの中でさえ感じていた、あの真っ直ぐな光を、景麒は恐らく生涯忘れる事はないだろう。その位、陽子との出会いは鮮烈に景麒の脳裏に焼きついた。

「契約の言葉です」

「契約？」

「そう」

この人は海客だったからか、と景麒は思う。だから、もしかすると自分がまだ王として選ばれた事も、全く分かっていないのではな
いか、と気付いた。

景麒は慎重に言葉を選ぶ。

「私は麒麟です。麒麟は本性によって感じる王気によって、一人の人を選びます」

心底不可解そうな顔をする陽子に、景麒はどう説明していいのかわからなくなる。下唇を軽く噛んで思案するように頬に指を軽く当てる。未だ自分を見詰め続ける陽子に、とにかく自分の言葉で彼女に伝えてみようと思った。

自分は彼女を選んだ。それが天から降り注ぐ『何か』に左右された選択であつたとしても、自分は今彼女という事がとても嬉しくてたまらない。出来れば陽子に、契約によって自分が彼女とどれ程までに近い存在になったのかという事を、自分の言葉で理解して欲しかった。

「王気というのは、麒麟だけが感じるものです。私は、貴女にそれを見た」

「私に…？」

そうです、と軽く柔らかな鬘を揺らして景麒はひとつ肯定する。

「王気は、その人が王である証。貴女は、王なのです」

「王？」

いまひとつ理解できない、といった陽子の瞳に、しかしじわりじわりと不安のようなものが浮かび上がる。どうしてだろう、景麒が今彼女に感じてほしいのは、恐れではなく歓びであるというのに。

陽子の不安はそのまま景麒の心の影となる。少々重く感じる自分の胸の内を持て余しながら、景麒はしかし、口を休めない。

「私の呼び名は景麒であり、それは慶国の麒麟だという話をしたでしょう？」

「ああ、…うん」

分からないながらも、ぎこちなく頷く陽子に、景麒は一步近づいた。麒麟にとって穢れであるはずの匂いは、風上である景麒の方へは薄れて届く。

「麒麟というのは、一国で一番偉い人である王を選ぶことのできる、ただひとつの生き物です。…わたしは、慶国の麒麟」

震えた陽子の唇が、ひゅ、と小さな音を立てて息を吸い込む。

宝玉よりもお美麗な色を放つ翡翠のような色をした瞳に、景麒の姿が映る。

「貴女は、わたしの選んだ、慶国の王様です」

景麒はまっすぐに陽子を見て告げる。どうか喜んで、と。自分に選ばれた事を、誇りに思っしてほしいと。

「…貴女は、わたしの、王様です」

天を仰ぐようにして見上げた王の顔は、景麒の位置からだ逆光でその表情を見る事が叶わなかった。光が赤い髪を透かして景麒に降り注ぐ。風に揺れてさらさらと流れるその様が、印象的に脳に焼き付いていく。

不規則な息遣いが零れ落ちる。彼女が次に何を言うのか、と景麒はぴんと背筋を伸ばして待った。その瞳には何も迷いを持たない。真っ直ぐに、陽子だけを見ていた。

「意味が」

やっとの事で陽子から発された声は、ひどく掠れていて、うまく聞き取れなかった。え、と顔の角度を左に傾けた景麒の耳に、唇を軽く舐めた彼女の声が今度はきちんと聞こえてくる。

「意味が、分からないんだが」

景麒はぼかんと口を開けた。陽子の声は大きく揺れ、そして景麒だけが感じ取れる光までもが、まるで満ちて行く潮のようにゆらゆらと蠢く。意味が分からないというのは、自分の説明が足りないという事なのだろうか。

景麒は瞳を伏せ、考えるように唇を軽く噛む。どう言えばいいのだろうかと考えていると、また少女の声が上から振ってきた。

「君は一体、何を言っているんだ？」

景麒の言っている事がまるで理解できない。そう言いたげな陽子の声に、景麒は少なからずむっとした。分からぬのならば何度でも説明をしてやろうと、胸を張りつつ陽子に言葉を返す。

「では、もう一度言います」

軽く息を吸い込み、景麒は吸い込まれそうな深緑の瞳に顔を向ける。

分かって欲しい、貴女はとても特別なのだと言う事を。その想いのせいか景麒の音量は自然と増し、張りが出る。

「あなたは、私という麒麟に選ばれたのです。私は麒麟、麒麟は王を選ぶ。だからあなたは、慶東国の王様なのです」

それだけです、と景麒は締めくくり、小さな鼻の穴から勢いよく、ふん、と自慢げに息を吐きだした。これがどれ程素晴らしい事なのか、これ以上に単純で分かりやすい説明はない、と景麒は満足する。しかし、陽子の眉は中央に寄せられ、まるで異物を見るような顔で景麒を見ているだけだった。彼女は、微かに震える指先を、ゆつくりと額に当て、そしてそれを滑らし眉間に当てる。指の隙間から見える彼女の目に、喜びの類のものは、何故かひとつも見えなかった。

「慶東国って？」

やっと出てきた言葉は、またも質問だった。景麒はなかなかに理解を示してくれない陽子に苛立ちながら、答えていく。

「あなたがいらっしゃったところが、まさに慶東国でした。世界の東に位置する国です。その慶国に住まう万の民が、ずっとあなたを待っていた」

それが当然の事だというような景麒の言葉に、陽子はゆつくりと目を見開いていき、少年の小さな顔を凝視する。そこだけ空気が固まってしまったような空間は、やがて陽子の、溜息を多分に含む笑いで溶かされた。

「何で…？王様って、私が？そんなの、有り得ないだろう」

景麒は陽子の発言こそが分らない、というように首を傾げる。その心底不思議そうな顔が、陽子を何とも不安定な心地にさせた。景麒は陽子は何故そのような事を言うのか、全く分からないのだ。

景麒は不思議そうに陽子の顔を見た後、また思いのままに口を開く。

「ありえないって…なぜですか？あなたがいた所がどうだったのかは存じませんが、ここはそういった所なのです。麒麟に選ばれた人が王です」

陽子は大きく横に首を振る。

「そんな、馬鹿な」

不器用な、乾いた笑いがその場に響く。景麒は、何故陽子がこれ程までに自分の言っている事を理解していないのかこそが、分からなかった。いや、景麒には、彼女はわざと理解しないようにしているように見えた。

景麒は頬を膨らませる。名誉な事なのに。王様がいるだけで、たくさんの民を助ける事が出来るのに。その事が、どうしてこの人には、分からないんだろう。

「もっと、喜んで下さい。素晴らしい事でしょう？」

景麒にとっては自然な事をいったつもりだった。しかし陽子は景麒の方を見て、そして泣き笑いのような表情を浮かべた。揺れる声が、景麒へと落ちていく。

「喜べないよ」

強い風が吹いた。草木の葉と葉が擦れる音が流れるように響き、陽子の声は遠くなって景麒へと届く。短い言葉は、景麒の耳へと届き、そしてやがて体へと浸透していく。景麒はずしりと実態のない重みが自分の体を襲うのを感じた。

「喜べない」

陽子の口角はゆっくりと上がる。三日月の形を象るそれは、何故か微笑には見えなかった。静かに、風が流れていく。

「嬉しくも、ないよ」

陽子の言葉を聞いて、景麒はその場に立ち尽くした。何故、と聞きたいのに声を出す事が出来ない。

唇が震え、喉からは声に鳴り損ねた音が、掠れては小さく出てくる。どうして、どうしてどうして。目が眩む。世界が真っ暗だ。分からない。何もかもが分からない。

喉が痛かった。唾が妙な味をしている。胸が、張り裂けそうだった。

雷を落とされたかのようにその場に立ち尽くした景麒の反応を見て、陽子は初めて、自分の発した言葉が失言だった事に気が付いたようだった。まるで親に見捨てられたような顔をしている幼い小さな顔を見て、猛烈な罪悪感が陽子を襲う。泣いてこそはいないが、口を大きく開けて痛い程に真っ直ぐに自分を見る顔は、傷ついた子供のそれだった。

けれど、先程のは陽子の本音だった。子供相手に大人げない、と言われようが、偽ることなど到底不可能だった。

王が具体的に何をするのか陽子は知らない。だけど彼女の知識が、それはとてつもない力を持つものだ、ということだけを教えてくれる。

一年前に来たこの奇妙な世界。親も友もない、孤独と共に彷徨った日々を思う。胸が焦がされるような郷愁を感じる度に、唇を噛み締めて涙を堪え、そしていつ襲われるか分からぬ不安と恐怖に、震えながら生きてきた。

明日、生きるかどうか。そればかりを考えてきた自分に、突如万の民が自分を待っているなどと言われても、どうしようもない。自分の事でさえ許容範囲に収まりきらぬ自分に、そのような事が理解できるはずがない。

「景麒」

陽子は麒麟を呼ぶ。ぴくり、とその短い指が動くのを視界の端に捕らえ、陽子は何とか申し訳程度の笑みを浮かべた。

「すまない。だが、わたしには、到底理解できない」

ごめんな、と小さく謝罪の言葉を落とし、陽子は踵を返す。

小さな麒麟は、風に揺れる花々の絨毯の中に、一人置き去りにされた。小さくなっていく少女の背中だけが、景麒の脳裏に焼き付いていた。

12.

勢いよく堂室に戻って来た景麒は、目に見えた書籍を両手で持つ。思い切り振り上げて、床に投げつけた。長い間読みこんできたその書物を、景麒は真っ赤に充血した目で睨んだ。

景麒は、王と言う責務を拒否した陽子が、憎い訳ではない。そもそも、元々麒麟とはそういった他人への負の感情を持たぬ生き物だ。自らの主君である彼女を憎めるはずもなかった。

しかし、自分では到底消化できそうにない薄暗い感情があとからあとから噴き出してきて、どういう風に処理していいのか分からない。だから、ものに当たる事しか出来なかった。

手当たり次第に壁や床に本や文具の類のもの、枕や小さな家具まで投げる。屋敷を傷つけているだけのはずのその破壊音は、麒麟の胸にちくちくと突き刺さった。胸が痛くて、息がしづらい。

やがて腕の力が尽き、景麒はその場に立ち尽くす。息を荒くして肩を揺らしていると、突如熱い固まりが喉の奥から込み上げてきた。嗚咽を堪える為に口を噤めば、その代わりに目頭が熱くなり、あつというまに頬を涙の粒が流れていく。眉間に力を思い切り籠めて、景麒は歯を噛み締める。

「……」

子供特有の声の上げ方で、景麒は泣いた。背後から芥瑚が静かに現れ、景麒をそっと抱きしめる。しゃくり上げながら、景麒は無茶苦茶に顔を擦り上げる。

王様が見つかるのは、誰にとっても良い事だと思っていた。勿論、選ばれた本人にとっても。

拒絶されるなどという事があるという事実を、景麒は七歳になって、初めて知ったのだった。

一人、白い廟堂の前で女仙が立っていた。遠い空を見上げ続ける彼女の瞳に、ひとつ小さな影が映る。徐々に近づいてくるそれは、騎獣に乗った一人の人であった。虎に酷似した獣にまたがったその人物は、見る間に女仙の傍へとやってくる。それに合わせて女仙は膝をつき、頭を深々と下げた。

軽やかにその人物が地へと足を着ける音が耳に届く。数歩歩いた人物が、女仙の傍で止まる。

「礼はいらぬ。顔を上げよ」

明朗な声が頭上から聞こえ、女仙は一拍置いてから、肅々と頭を下げる。目に見えた人物は二十代半ばの背の高い青年であった。黒々とした髪を靡かせ、どこか不敵な笑みを浮かべるその態度は、堂に入ったものがある。

女仙は拱手し、再度頭を下げる。

「ご足労いただき恐縮でございます。延王君におかれましては、ご機嫌麗しゅう——」

そう言えば、青年は声を上げて笑った。どこか飄々とした、憎めぬ雰囲気が滲み出る。

「ああ、機嫌は悪くないな。何せ、落ち着かぬ隣国の王君が見つかったという報告を受けて飛んできたところだ。それが若い女王であるとくれば、俺としては文句があるはずもない」

そう言つて悪戯っぽく笑う彼に、女仙は何とも言えぬ笑みを漏らす。その曖昧な表情に何かを感じたのだろう。ちらりと彼女を見た後、彼はそれきり口を閉じた。

女仙は彼の佇まいを見て、首を傾げる。

「延台輔は、ご一緒ではないのでございましょうか」

青年は何事もないように頷いた。片手を首の後ろに当てて、軽く骨を鳴らす。

「あれはうるさいのに捕まったからな。まあ、後から逃げて来る

だろう」

何でもないように放たれた言葉に女仙は一時固まり、それから深い深い溜息をついた。その彼女の反応を見て、青年は面白そうに笑う。

「何だ？」

女仙は米神に手を当て、力なく首を振る。

「いえ、雁国の皆様も、その、相変わらずで。よろしゅうございますね」

言葉を選び選言ったせいだろうか、途切れがちなその台詞を聞いて、男はにやにやと笑う。

「何だ。何か含むところでもあるのか？」

「まさか」

唇に笑みのようなものを浮かべ、女仙は申し訳程度に微笑んだ。

「相変わらず仲がよろしいようで、羨ましゅうございます」

「羨ましいか。ではそなたもうちの古城に来るか？男所帯でむさくるしい故、少しでも華があれば、俺も潤う」

「私のような下賤の者に身にあまるお言葉。ですが、結構でございます」

きっぱりと返って来た台詞に、男は唇の片端を上げて、肩をすくめた。

暫く回廊を歩いていた二人だが、やがて青年の方が口を開く。

「で、景麒の様子はどうか。前に顔を見たのが：三年前か？今は七つか。でかくなったのだろうか」

「ええ、それはもう。見た目だけでなく、お話しになる口調や内容が、非常に大人びていらっしゃいます」

ほんのりと笑う様に青年も頷く。

「四歳の時で既に可愛げがなくなってきたからな。どういう麒麟になるのか、と少々不安だったが」

「それは蓬山公に失礼でございますわ。早熟なのは否めませんけ

れども、嘘のつけない素直な性格をしていらっしやいます。まだまだ可愛らしい麒麟には違いありません」

最後はまるで親のような顔をして話す女仙に、青年は何も言わずに視線をさりげなく逸らした。女仙は滅法麒麟に弱い。それが歳がまだ十にも満たぬ麒麟ならばなおさらである。下手な事を言って刺激しては、この地に住まう女仙を全て敵に回す事になりかねないのだ。

青年は腕を組み、話を切り替える。

「景王は？ いかがお過ごしだ」

女仙は唇を舐め、言葉を選ぶ仕草を見せた。

「誓約なさる前に、かなりひどい大怪我をなさっておいででしたので、今はまだご養生なさっておいでです」

そうか、と軽く頷いた青年は、少し思案するように目線を動かし、そしてもうひとつ問いを投げる。

「それで？ 王に選ばれた事に対し、どういった反応を？」

今度こそ女仙の顔が曇るのを青年は見逃さなかった。足を止めた女仙に、一拍遅れて青年も足を止める。

頬に手を当て、ほう、と息をついた女仙は、青年の顔を仰ぎ見る。

「それが、王というものをよくご存じでなく…」

「は？ 何故」

口を開けて怪訝な表情をした青年を、女仙は真っ直ぐに見て話した。

「景王君は、海客でいらっしやるのです」

青年は動きを止める。黒眸が光を受けて反射し、独特の輝きを見せる。

「海客？」

ええ、と頷いた女仙に、青年は一度口を噤む。女仙を真っ直ぐに見たその表情は先程までの軽いものは掻き消え、威圧感さえ感じさせるものになる。奥深くなっていく瞳が、女仙の顔を薄暗く映し出す。

「胎果か」

今度は問いではなく、単なる自分への確認のようだった。女仙は今一度頷く。

「左様でございます。新たなる景王君は、貴方様と同じ、胎果であらせられます」

青年は暫く黙る。風を受けて後ろでまとめた髪が軽く靡く。そうか、と言った唇の端が、ゆっくりと上がった。

雲の上にある海、というものを少女は見ていた。

はじめて見せてもらった時、驚愕に息も出来なかった。しかしこれはこの世界の人間達にとっては常識の事らしく、この光景を見せた女仙は、驚いている少女の事こそを驚いていた。

この景色は、陽子が一年前にいた所とは全く別の遠いところまで来てしまったのだ、という事実をまざまざと見せつけた。ここは穏やかで安全で、食べ物に困る事もない。今までに生きてきたところに比べれば断然こちらの方が楽だが、だからといってここにいるのが幸せか、と聞かれれば、首を横に振るしかない。

息を吸いながら、遠くを見してみる。手を伸ばしてみるが、その先に何があるのかさえも分からないのにそうしている自分が、ふいに馬鹿のように思えた。

目を瞑れば、その拙い息遣いの細部までもが聞こえてくる。幼い少年の放った、貴女は王なのです、という、自分の貧困な想像力では思い描く事すらできないような宣言が。

どうして、彼はあれ程までに誇らしげだったのだろう。もし彼が言っている言葉が本当だったとして、自分のような若い女に任せられるのだと思ったら、彼は陽子が思っている以上に幼い。国どころか、自分が今どこにいるのかさえ分かっていない自分に、何を任せ

ようとしているのだろう。あの幼さが、とても哀れだと思った。

陽子は目を開け、再度空に浮かぶ海を見た。穏やかな音と共に、潮の匂いが香る。

この海を泳いでいけば、どこに辿りつくのだろう。

故郷に帰る事が出来ずとも、何も考えずにこの海を穏やかに泳いでいけるのなら、それでもいいかもしれない、と少女は思った。

海から目を逸らし空を仰げば、頬を熱いものが伝った。

何故、自分はここにいるのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4781t/>

東方千年歌

2011年11月21日06時49分発行